沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要（Bull. Mus., Okinawa Pref. Mus. Art Mus.），№ 4，pp. 11－38，2011

沖縄島南部における先史遺跡の分布と立地について

山　崎　真　治[1)]

A Settlement Analysis about Prehistoric Sites in the South of Okinawa-jima Isl.

Shinji YAMASAKI[1)]

要　旨

本稿では、沖縄島南部（南城市、八重瀬町、糸満市）における先史遺跡を後期更新世（OIS 3 ～OIS 2（LGM））、ML（Missing Link）期、縄文時代早期～中期、縄文時代後・晩期、弥生～平安平行時代に区分し、その分布と立地について、検討を加えた。その結果、以下のことが明らかとなった。

更新世の遺跡立地は、当時の海岸線から離れた内陸部に位置しており、縄文時代以降の沿岸部を好む遺跡立地とは根本的に異なっている。ML期の遺跡立地は、縄文時代早期～中期のあり方に近いと言えるが、不明な点が多い。縄文時代早期～中期では、遺跡規模は小さく、移動性の高い生活形態が想定される。これに対して、縄文時代後・晩期の主要遺跡は２～３km程度の範囲内への集中が顕著で、遺跡規模も増大する。また、生活遺跡から墓地が分化する。縄文時代後・晩期には、遺跡の分布範囲が限定されること、累代的な墓地が形成されることから、相当に強固な定住性が確立していたと考えられる。続く弥生～平安並行時代には、拠点的遺跡の数や規模、内容に一層の充実が認められ、さらに定住性が強化されたと考えられる。また、沖縄島南部では、縄文時代から弥生～平安並行時代にかけて低地で砂丘が発達した。この間の過程について、糸満側と南城側では若干の相違が認められるが、これは両地域における遺跡立地の差異を生み出す素地を提供することになったと考えられる。

１はじめに

沖縄県には隆起サンゴ礁からなる石灰岩（琉球層群）が広く分布しており、石灰岩特有の地形である鍾乳洞やフィッシャー（割れ目・裂罅）が数多く見られる。こうした洞穴やフィッシャーの堆積物中からは、港川人をはじめとする人類化石や絶滅種のシカ類など、保存の良い動物化石が豊富に発見されている。こうした地質的好条件を踏まえて、沖縄県立博物館・美術館では、2006年度より新たな人類化石の発見をめざして沖縄島南部の洞穴遺跡の発掘調査を継続的に実施している（沖縄県立博物館・美術館 2009、2010）。

当館がフィールドとしている南城市から糸満市に至る石灰岩地帯には、多くの洞穴・岩陰遺跡が分布しており、先史時代以来、この地域の洞穴・岩陰が人々の暮らしと深く関わってきたことが知られる。こうした洞穴・岩陰をめぐって展開された人類活動を考察するためには、洞穴・岩陰そのものの形成過程や地史に対する理解が必要不可欠となる。とりわけ沖縄では、更新世から完新世にかけて隆起・沈降や海進・海退といった地質・地形的変動が頻繁かつ大規模に繰り返されたことが知られており、沖縄の洞穴･岩陰遺跡の歴史性と特質を理解するためには、そうしたマクロな地史と遺跡そのもののミクロな形成過程を、統合的に説明するモデルの構築が望まれる。

そこで、本稿では沖縄島南部における先史遺跡一般をとりあげて、その分布と立地について概観し、遺跡の形成過程とそれをとりまくマクロな海水準変動や地形形成史との関係について言及することにし

[1)] 沖縄県立博物館・美術館　〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan.

たい。なお、本稿では対象とする地域、時代の性格上、主として糸満市・八重瀬町・南城市をさして便宜的に沖縄島南部と呼んでいる。行政区分上の呼称とは異なっているので、あらかじめお断りしておきたい。

本稿の構成は以下の通りである。

1 はじめに
2 編年
　2―1　後期更新世末（酸素同位体ステージ（OIS）3～2）
　2―2　ML期（空白期）
　2―3　土器出現期以降の編年
3 遺跡群の概観
　3―1　地形・地質
　3―2　遺跡群の概要
4 遺跡群の通時的変化
　4―1　後期更新世
　4―2　ML期（空白期）
　4―3　縄文時代早期～中期
　4―4　縄文時代後・晩期
　4―5　弥生～平安並行時代
5 議論
　5―1　沖縄島南部における先史時代人の生業形態と定住性
　5―2　海水準変動・砂丘形成と遺跡立地
6 結語

2 編年

沖縄島南部における先史遺跡群は、①後期更新世（先土器時代）、②縄文時代（前期貝塚時代）、③弥生～平安並行時代（後期貝塚時代）に編年することができる[1]。以下では上記の編年に関して細部に立ち入った先史学・考古学的議論を扱うので、必要のない方は、「3 遺跡群の概観」の項まで読み飛ばしていただいて差し支えない。結論が先になるが、第1表には本稿で用いる暫定的な編年を示す。

従来、沖縄における先史時代の編年は、物質文化に基づいた考古編年が中心的役割を担ってきた。しかし近年では、考古編年の精緻化と並行して、生層序学的手法やC14年代測定といった自然科学的手法に基づいた編年、年代決定も試みられており、大きな成果を挙げている（木村･安里ほか　2003、大塚･中村ほか　2008、名島・安斎ほか　2008、山崎・藤田ほか　2010、Nakagawa et al.　2010）。本稿では、考古編年と矛盾のない範囲で、そうした自然科学的年代についても積極的に言及することにしたい[2]。

2―1 後期更新世末（酸素同位体ステージ（OIS）3～2）

これまでのところ、沖縄島南部で知られている最古の人類遺跡は、那覇市山下町第1洞穴遺跡や八重瀬町港川フィッシャー遺跡で、後期更新世末に遡る。山下町第1洞穴遺跡では、小規模な石灰岩鍾乳洞内を充填するシカ化石包含層（Ⅵ層）の上面を覆う炭化物層（Ⅲ層およびⅤ層）に含まれる木炭から、32,100 C14 BP(TK―78)の年代値が得られており、この炭化物層中からヒト（幼児）の大腿骨および脛骨が検出されている（高宮･金武ほか　1975）。港川フィッシャー遺跡では、石灰岩採石場内に開口する地表下約20mに達するフィッシャー内に堆積した土壌中から、イノシシやリュウキュウジカ、リュウキュウムカシキョンといった絶滅シカ類などの動物化石とともに、4体分＋αの人骨が回収されている。人骨とともに回収された木炭からは、18, 250 C14 BP (TK―99) および16,600 C14 BP(TK―142)の年代値が得られている（Suzuki and Hanihara 1982）。山下町や港川では明確な人工遺物は検出されていないが[3]、これらの年代値は酸素同位体ステージ（OIS）2および3に相当し（工藤　2010）、この時期の沖縄島に人類が到達していたことを示す重要な証拠となるものである。このほか、絶滅種のシカ類化石を産出する洞穴やフィッシャー堆積物は沖縄島南部一帯で数多く知られている（大城･野原　1977）。こうした化石群集の形成過程に、人類が関与した可能性についても議論されているが、現状のデータは否定的と言わざるをえない（加藤　1977、沖縄県立博物館･美術館　2009ほか）。

沖縄島における絶滅シカ類の層序的位置については、早くに南城市具志堅ウージ洞穴で縄文時代後期の包含層の下位よりシカ類化石が産出することが確かめられ（多和田　1956）、港川フィッシャー遺跡ではフィッシャー堆積物の下部にシカ類が多く、上部にイノシシが多く産出した（長谷川　2002）。最近で

第1表 編年表

時代区分 Period			遺跡名・型式名 Site or culture	C14年代値(C14 BP)	文化相 Cultural aspect	動物相 Fauna
完新世(Holocene)	弥生～平安並行時代（後期貝塚時代） Yayoi-Heian Parallel (Late Shellmound) Period					
	縄文時代（前期貝塚時代） Jomon (Early Shellmound) Period	晩期 Final	宇座浜式・仲原式 Uzahama, Nakabaru	2,535 C14 BP（武芸洞）	墓地 Grave yard	
		後期 Late	大山式・室川式 Oyama, Murokawa			
			面縄東洞・伊波・荻堂式 Omonawa-todo, Iha, Ogido			
			仲泊式 Nakadomari		竪穴住居 Pit dwelling	
		中期 Middle	面縄前庭式 Omonawa-zentei			
			（条痕文?） Jokon-mon?	4,000 C14 BP （平敷屋トウバル）	貝塚 Shellmound	
			室川下層式 Murokawa-kaso			
			条痕文 Jokon-mon			
		前期 Early	曽畑式 Sobata		貯蔵穴 Storage pit	
			爪形文土器（ヤブチ式、東原式） Tsumegata-mon	5,978 C14 BP （武芸洞：土器付着炭化物）		
		早期 Initial	無文土器? Plain pottery?	6,920 C14 BP （野国BⅦ層）		
			刺突条線文土器? Shitotsu-josen-mon?	6,998 C14 BP （喜界町総合グラウンド：土器付着炭化物）		
	ML期（空白期） ML period		港川上部 Upper Minatogawa	8,640 C14 BP	土器出現 Emergence of pottery	
			ティーラガマ（ウフニクガマ） Ti'ragama (Ufu'niku-gama)	9,090 C14 BP 9,785 C14 BP		
後期更新世(Upper Pleistocene)	酸素同位体ステージ2 (OIS2) 最終氷期最盛期 (LGM)		カヤウチバンタ? Kayauchi-banta?			
			港川下部 Lower Minatogawa	18,250 C14 BP		イノシシ Wild boar
			真栄平(F1) Maehira F1	23,139 C14 BP 19,850 C14 BP	先土器? Pre-pottery?	現生動物 Present animal
	酸素同位体ステージ3 (OIS3)		山下町 Yamashita-cho	32,100 C14 BP		絶滅シカ類 Extinct deer

は、宜野湾市新城下原第２遺跡において、爪形文土器包含層のさらに下位に位置する堆積層中（ＸⅡ・ⅩⅢ層）からシカ類化石が検出されている（沖縄県立埋蔵文化財センター　2006）。これまでのところ、シカ類化石そのものの年代測定に成功した報告例はないが[4]、上述のように、山下町ではシカ類化石包含層（Ⅵ層）を覆う炭化物層（Ⅴ層）から32,100 C14 BPの年代値が得られており、絶滅シカ類のおおよその年代的位置を推測する手掛かりとなる。

一方、イノシシの出現年代については従来、漠然と完新世以降とされてきたが、港川では少量ながらフィッシャー下部の堆積層中よりシカ類とともにイノシシが産出しており（長谷川前掲）、糸満市真栄平（山崎・藤田ほか　2010）、宜野湾市嘉数テラガマ（宜野湾市教育委員会　2005）ではイノシシ化石のみを包含する堆積層中より採取された木炭から、OIS２に遡る年代値が得られている。このことから、イノシシは後期更新世末にシカ類と交代する形で登場し、完新世まで残存したと推定される。したがって、イノシシを完新世動物群の要素としてのみ理解することは適当でない。シカ類とイノシシの交代時期は、現状のデータに拠ればOIS３と２の境界付近に位置する可能性が高い[5]。

２―２ML期（空白期）

上記の港川人をはじめ、沖縄における更新世人類の年代値の多くはOIS２の最終氷期最盛期（LGM）に集中しており、LGM以降、明確な人類文化としては沖縄最古とされる6,000 C14 BP前後の爪形文土器文化の登場に至るまで、沖縄島では人類の活動痕跡が見出せない空白期（Missing Link）が介在するとされてきた（新田　1973、沖縄考古学会　1978、古川　1980など）。以下では、この空白期を便宜的にML期と呼ぶ。

ML期に相当する年代値が得られたサイトは数少ないが、港川フィッシャー遺跡上部（具志頭村教育委員会　2002）や、南城市ティーラガマ（ウフニクガマ）[6]（山崎・横尾ほか　2010）では8,000 C14 BPを遡る年代値が得られており、注目される[7]。いずれも遺跡近辺には自然分布しない海産貝（汽水産貝）を試料とした年代値であり、間接的ではあるが当該期における人類活動を裏付けるデータとして重要である。一方、港川上部やティーラガマでは、このような古い年代値が得られた貝類に、従来沖縄では類例のない波状文土器などが伴出している。これらの土器については、型式学的に縄文前期以降の条痕文土器などと関連づけて捉える見方もある（伊藤慎二　2008）。しかし、筆者が現地を検分し、関連資料を精査した範囲では、包含層の堆積状況や遺物の産状に不審な点は見られなかった。したがって筆者は、上記の年代値を出した貝類と土器は共伴するものであり、両者の堆積時期に大きな時期差はないと判断している[8]。

ところで、沖縄におけるC14年代値と、想定される実際の年代との間にある程度の誤差が生じることは、すでに北谷町伊礼原遺跡の報告書等において指摘されている（辻　2007など）。海産貝や海洋性の資源を多く摂取する動物遺体に基づいた年代測定値では、いわゆる海洋リザーブ効果の影響も予想される。また、石灰岩地帯では、石灰岩から溶出した古い炭素の影響も大きいと言われており、このような誤差をどこまで考慮するかによって、年代値の解釈も異なってくることになる。

しかし、少なくとも現在までに沖縄で得られている年代測定値を見る限り、信頼性の高い試料であれば、C14年代値と実年代（または試料について想定される層序・考古年代）との間に千年を超えるような誤差が生じることはない[9]（名島・安斎ほか　2008）。したがって、①港川やティーラガマの土器が沖縄では適切な類例の見出せない特異な土器であること、②両者の土器に関連するC14年代値が従来知られている沖縄最古の土器の年代値よりも古いことは、互いに調和的であると判断できる。このことから、筆者は暫定的に、沖縄島には8,000 C14 BP以前に遡る土器文化、すなわち縄文時代早期前葉相当の土器文化が存在した可能性を推定しておきたい。

以上のようなML期に含まれる年代値を出したサイトについては未解明の部分が多く、その実態については今後の研究を待たなければならない。しかし、従来空白期と認識されてきた後期更新世末～完新世初頭の沖縄においても、人類活動の痕跡をうかがうことのできる事例が報告されるようになってきたことは、近年の沖縄考古学における最重要事項の一つと言えよう。

２―３土器出現期以降の編年

次に、沖縄における土器出現期以後の編年について言及しておく。この時期の編年については数多くの研究があり(高宮　1984など)、県史編年では沖縄における縄文時代は、早期、前期、中期、後期、晩期の５期に大別されている(安里　2003)。また弥生～平安並行時代については諸説があるが、新里貴之氏は無文尖底系とくびれ平底系に大別し、さらに細分を試みている（新里　2008b)。ここで編年の細部に立ち入った検討を行うことは、本稿の主題から大きく外れることになるので、以下では重要と思われる問題点について二三私見を述べるに留めたい。

Ａ爪形文文化期とその周辺

内容の明確な土器文化としては沖縄最古の爪形文土器文化は、多種多様な石斧や骨貝製品など高度な文化内容を示し、その出現は一見唐突な感がある[10]。爪形文土器は、奄美大島の喜子川遺跡でアカホヤ火山灰層の上位から出土することが確認されており(笠利町教育委員会･笠利町歴史民俗資料館　1989)、その年代はアカホヤ火山灰降下以後に位置づけられる。アカホヤ火山灰の降下は、福井県水月湖の年縞堆積物の分析からAD1995年から7,325年前とされており（福沢　1995)、縄文早期末、6,300～6,400 C 14 BP前後に相当する。

第２表には爪形文土器に関連するC14年代値を示した。このうち、読谷村渡具知東原遺跡で爪形文土器包含層から得られた年代値は、想定されるアカホヤ火山灰降下の年代よりもやや古く、喜子川遺跡の層序と矛盾する結果になっている。一方、近年、爪形文文化期について報告されている年代値はいずれも6,100 C14 BPよりも新しく､6,000 C14 BP前後に集中する。総合的に見た場合、渡具知東原の年代値は実際よりも500～600年程古く出ているものと見られる。

ところで、嘉手納町野国貝塚B地点（沖縄県教育委員会　1984）や、宜野湾市新城下原第２遺跡（沖縄県立埋蔵文化財センター　2006)、名護市大堂原遺跡などでは、爪形文土器包含層の下位から、無文土器を伴う文化層が検出されており、無文土器を主体とする文化が、爪形文文化に先行することは確定的な状況である[11]。この種の無文土器の実態については不明瞭な部分が多く残されているが、爪形文土器に

第2表　爪形文土器に関連するC14年代値

遺跡名	測定番号	C14年代測定値（未較正）	試料の種類	半減期	備考	文献
渡具知東原	GAK-6473	6670 ± 140	木炭	5,570	爪形文土器包含層	読谷村教委・読谷村歴史民俗資料館 1977
	GAK-6474	6450 ± 140	木炭	5,570		
	GAK-6475	6560 ± 140	貝	5,570		
野国貝塚B地点	N-4709	5780 ± 90	木炭	5,568	爪形文土器包含層（Ⅳb層）	沖縄県教委1984
	N-4710	6070 ± 145	木炭	5,568	爪形文土器包含層（Ⅴb層）	
	N-4711	6920 ± 80	貝	5,568	無文土器包含層（Ⅶ層）	
新城下原第二	IAAA-32213	6077 ± 52	獣骨（イノシシ）	5,568	爪形文土器包含層（Ⅸb層）	沖縄県立埋文センター2006
	IAAA-32214	6413 ± 51	獣骨（イノシシ）	5,568	ⅩⅢc層	
	IAAA-32215	6022 ± 51	獣骨（イノシシ）	5,568	ⅩⅣ層	
武芸洞	PLD-14291	6000 ± 25	木炭	5,568	11区4層	沖縄県立博物館・美術館　2010
	PLD-16226	5980 ± 25	土器付着炭化物	5,568	爪形文土器（ヤブチ式）	今回測定
喜界町総合グラウンド	名古屋大学	6998 ± 32	土器付着炭化物		刺突条線文土器	澄田・堂込ほか 2003

似て器壁は薄く丸底で、口縁部に肥厚帯を有するものもある（伊藤　圭　2007b）。現在までに知られている無文土器に直接関連するC14年代値は、野国B地点Ⅶ層の貝について得られている１例のみで、6,920 C14 BPと報告されている。この年代値は、後述の喜界島の総合グラウンド遺跡（弓道場地点）の刺突条線文土器について報告されている6,998 C14 BPという年代値にも近く、両者の年代値の解釈は今後の課題である。

類似の無文土器は、新城下原第２遺跡で爪形文土器包含層（Ⅸ層）の下位に位置するⅫ層でも１点出土しており、このⅫ層を挟んだ上下の層準から回収されたイノシシ骨についてC14年代測定が実施されている。それによれば、Ⅸ層では6,077　C14　BP、ⅩⅢ層では6,413 C14 BPの年代値が得られており、Ⅻ層の無文土器包含層は6,400～6,000 C14 BPの間のある時期に堆積した可能性が考えられる[12]。この場合、新城下原の無文土器の年代は、野国B地点Ⅶ層のそれよりもかなり遅れることになり、両者間の不整合について再検討が必要となる。筆者は主として型式学的観点から、刺突条線文土器（喜界町総合グラウンド）→無文土器（野国BⅦ層・新城下原Ⅻ層）→爪形文土器（ヤブチ式）→爪形文土器（東原式）という変遷過程を想定しているが、この問題については、別途論じる機会を得たい。

爪形文土器に関連する古いC14年代値としては、喜界町総合グラウンド遺跡から出土した刺突条線文土器の土器付着炭化物から得られた6,998 C14 BPの年代値が知られている（澄田･堂込ほか　2003）。総合グラウンドの刺突条線文土器は、古砂丘中に埋没したクロスナ層から多量の陸産貝類（マイマイ）および少量の海産貝類や動物遺体（イノシシ、ネズミ類等）とともに出土しており、完形土器２点と土器片多数が回収されている。同遺跡では、爪形文土器も少量見られるようであるが、年代値そのものについて見ると、後述するアカホヤ火山灰降下の年代や爪形文土器の土器付着炭化物の年代よりも古く、野国B地点Ⅶ層の無文土器の年代に重なる。総合グラウンドの土器については、爪形文土器に後出し条痕文系に系統的に連続するという型式学的指摘もある（伊藤慎二　2008）が、爪形文土器の中でも層序的に後出する東原式では、器壁は厚くなり、横走沈線や条線文も見られないことから[13]、爪形文土器の型式変化の延長上に総合グラウンドの土器を置くことは難しい。C14年代値からは、むしろ爪形文土器に先行するものであり、先述の港川上部の波状文土器などとの関連を考えたい。

このほか、国頭村カヤウチバンタ遺跡で採集された丸ノミ形石斧は、南九州縄文草創期の隆帯文土器に伴う栫ノ原型石斧との関連が指摘されており、注目されるものである（小田静夫　1997）。

Ｂ条痕文系土器群の位置づけ

爪形文土器に続く曽畑式は九州から渡来した土器型式であり、その内容や年代的位置づけはかなり詳しく研究されている。沖縄で出土する曽畑式には、すでに多くの指摘がある通り、九州本土の曽畑式には見られない在地的変容が認められる。しかしその一方で、年代的に先行する爪形文土器群とは全く異質な土器群と言え、現状では両者を直接的に結びつけることは困難である。したがって、沖縄における曽畑式土器とその文化は、九州から南下した人類集団の文化的影響を強く受けたものと見なければならない。

曽畑式前後に位置づけられている土器型式として、条痕文土器や室川下層式など、いわゆる条痕文系土器群が挙げられる[14]。かつて高宮廣衞氏（1993b）は、室川下層式土器について記載する中で、室川下層式の上限を河口貞徳氏（1985）による轟Ⅲ式以前に遡るものとし、轟A式やC式（松本・富樫　1961）との関係を想定している。また、下限については春日式や面縄前庭式の時期まで下降する可能性を指摘している。一方、近年の轟式土器研究（栗畑　1999）では、河口氏による轟Ⅰ～Ⅳ式や松本・富樫氏による轟A～D式は、条痕文という要素では共通しながらも、異なる複数の時期に及ぶものであることが明らかとなってきた。すなわち、河口氏の轟I式は早期末の轟A式、Ⅱ式は前期前葉の轟B式、Ⅲ･Ⅳ式は前期末～中期初頭の日木山式に、ほぼ相当する。また、松本・富樫氏の轟A式は早期末、B式は前期前葉、C･D式は前期末に、おおむね位置づけられる。要するに現在九州では、条痕文は曽畑式を挟んで古新に大きく２分され、相互に直接の関係はないと考えられている。

高宮氏は、渡具知東原で曽畑式や条痕文土器包含層よりも上位から室川下層式が出土し、曽畑式や条痕文土器が「室川下層式に先行する状況を示していた」ことを認めながらも、室川下層式を曽畑式よりも古く位置づけた。これは、宝島大池で室川下層式と轟Ⅲ式が共存すること、神野貝塚B５区第Ⅸ層では室川下層式や神野A式とともに轟Ⅲ式が出土し、さらに下位のⅪ、Ⅻ層では室川下層式のみが出土することに基づくものである（高宮前掲）。しかし、轟Ⅲ式が曽畑式に後出することが判明した現状では、室川下層式もまた曽畑式に後続するものと考えなければならない。奄美市宇宿小学校構内遺跡では、第４文化層から条痕文土器が、第３文化層から条痕文土器と室川下層式が出土しており、条痕文土器と室川下層式との層序関係が明らかにされている（奄美考古学研究会編　2003）。また最近、相美伊久雄氏(2010)は鹿児島県宝島大池遺跡における伴出事例や深浦式・春日式との対比から、条痕文土器が日木山式に、室川下層式が深浦式～春日式に並行することを論じている。

一方、伊藤慎二氏（2008）は条痕文系土器を、爪形文土器に後続し曽畑式期をへて室川下層式まで引き継がれる息の長い系統ととらえ、その継続期間の一部に曽畑式が介在することを想定している。しかし、現在のところ沖縄では、曽畑式の下位から条痕文が出土したという確実な層位的データは得られていない。また、北谷町伊礼原遺跡では低湿地区で曽畑式が、砂丘区で室川下層式と条痕文が、ほぼ純粋な形で出土しており、名護市大堂原貝塚ではⅤ・Ⅵ層およびⅦ層上面で室川下層式と条痕文が、Ⅶ層中～下位では曽畑式が出土すると言う（岸本　2006）。したがって、曽畑式と条痕文との間には、多少の重複期間は想定されるが、基本的には時期差が存在したものと推定でき、層序的には曽畑式が古く、条痕文が新しい。

ただし、伊藤氏が条痕文系古段階とする鹿児島県知名町中甫洞穴第４層の貝殻文土器（知名町教育委員会　1985）は、沖縄では類例がなく、位置づけの難しいものである。しかし、全体的な構成は室川下層式等に近似しており、これに伴出した条痕文土器は、器壁や条痕の感じから見て、宇宿小学校構内遺跡第４文化層の条痕文などに関連するものと見られる。以上の点から、筆者は中甫の土器は曽畑式よりも新しく、尾田式や日木山式に関係するものと推定している[15]。

ところで、最近報告されたうるま市平敷屋トウバル遺跡（うるま市教育委員会･イーエーシー　2008）の条痕文土器出土層（Ⅸb層）について得られた年代値は、4,020 C14 BPというものであり、この年代値は関東地方後期初頭の称名寺式の年代値に近い（小林　2008）。平敷屋トウバルの条痕文土器は、いわゆる神野B式に類似するもので、年代的には室川下層式と面縄前庭式との間に入る資料と考えられる。仮にこの部分の年代が確かに4,020 C14 BPであるとすれば、従来、縄文中期とされてきた面縄前庭式の位置づけについても見直しが迫られることになる。この問題は大変重要であるが、現状では立ち入った検討は困難であり、今後の課題としたい。

室川下層式から面縄前庭式への変遷過程については未解明の部分も多く、神野A式や宇和川原の土器（高宮　1991）など、この時期に関係しそうな類例の乏しい土器群もいくつか知られている。今後のデータの蓄積が望まれる。

Ｃ縄文晩期土器の年代

次に、沖縄における晩期土器の年代をめぐる問題を取り上げておきたい。現在、沖縄の縄文時代晩期には室川上層式、宇座浜式、仲原式などが位置づけられている（高宮　1984など）が、これらに関連するC14年代値を第３表に示す。

大山岳之佐久原第１の年代値はカヤウチバンタ式、シヌグ堂は宇座浜式～仲原式に伴うものと推定され、3,100～2,700 C14 BP前後の年代値が得られている。一方、仲原式が主体を占める志堅原では2,600 C14 BP前後の年代値が得られている[16]。同じく仲原式に伴うと推定される喜友名東原ヌバタキの年代値は、半減期5,730に基づいており他の年代値よりも100年程度古く出ていると見られるが、この点を考慮すれば、ヌバタキの年代も志堅原の年代と大差ないものと判断できる。

宇座浜式～仲原式に伴うと推定される武芸洞石棺墓出土の最終埋葬人骨（第１号人骨）から得られた年代値は2,535 C14 BPで、志堅原およびヌバタキの仲原式の年代値に近い。同様に石棺墓から得られ

第3表　縄文時代晩期に関連するC14年代値

所在地	遺跡名	遺構	土器型式	試料	測定番号	C14年代	δ13C (‰)	半減期	備考	文献
宜野湾市	大山岳之佐久原第1	II区ブロック3　竪穴住居1	カヤウチバンタ式主体	木炭	IAAA-30331	3050±50	-22.46	半減期5,568	竪穴住居1は竪穴住居2を切る	沖縄県立埋文センター　2004
宜野湾市	大山岳之佐久原第1	II区ブロック3　竪穴住居2	カヤウチバンタ式主体	木炭	IAAA-30332	3130±50	-19.24	半減期5,568		同上
うるま市	シヌグ堂	第49号竪穴住居跡(埋土)	宇座浜～仲原	木炭		2960±65		半減期5,568？		沖縄県教委 1985
うるま市	シヌグ堂	第7号竪穴住居跡(床面)	宇座浜～仲原	木炭		2770±90		半減期5,568？	8、41、61号竪穴住居跡を切る。	同上
うるま市	シヌグ堂	第8号竪穴住居跡(埋土)	宇座浜～仲原	木炭		2970±65		半減期5,568？		同上
うるま市	シヌグ堂	第44号竪穴住居跡(床面)	宇座浜～仲原	木炭		3030±70		半減期5,568？		同上
読谷村	木綿原	5号箱式石棺墓	宇座浜～仲原	副葬シャコガイ(人骨の胸左に出土)	Gak-7052	2520±100		半減期5,570		読谷村教委・読谷村立歴史民俗資料館 1978
読谷村	木綿原	1号箱式石棺墓	宇座浜～仲原	第3号人骨(伏臥伸展)共伴サラサバテイ(額部下より出土?)	Gak-7053	3420±120		半減期5,570	1号石棺の下部埋葬に伴う。	同上
読谷村	木綿原	第1号人骨(石棺を伴わない)	伊波・荻堂？	副葬シャコガイ	Gak-7054	3520±120		半減期5,570	VI層中出土。石棺墓群より古い埋葬と考えられる。	同上
八重瀬町	ガルマンドウ原洞穴		縄文晩期終末～弥生前期前半	人骨(歯)	Beta-217084	2720±40	-15.2	半減期5,568		松下孝幸編 2007
南城市	志堅原	土坑「集石遺構」(A)	仲原式主体	木炭	PAL-831	2580±90		半減期5,570		玉城村教委 2002
南城市	志堅原	土坑「集石遺構」(C)	仲原式主体	木炭	PAL-832	2590±130		半減期5,570		同上
宜野湾市	喜友名東原ヌバタキ	8号竪穴住居址	仲原式主体	ヤコウガイ蓋		2610±80		半減期5,730		宜野湾市教委 1991
宜野湾市	喜友名東原ヌバタキ	5B号竪穴住居址	仲原式主体	木炭		2880±80		半減期5,730		同上
南城市	武芸洞	石棺墓(SX2)	宇座浜～仲原	人骨(脛骨)	PLD-14289	2535±20	-17.65	半減期5,568	最終埋葬	沖縄県立博物館・美術館 2010

た年代値として、木綿原５号石棺墓で人骨（第９号）に伴ったシャコガイから得られた2,520 C14 BPがある。武芸洞と木綿原５号石棺墓の年代値は相互に調和的であり、この種の石棺墓が2,500 C14 BP前後に沖縄で盛行したことを示す大変重要なデータとなる。一方、木綿原１号石棺墓下段の人骨（第３号）に伴ったとされるサラサバテイから得られた年代値は3,420 C14 BPで、石棺墓群の構築層準よりも下位の層準から検出された第１号人骨に伴ったシャコガイの年代値3,520 C14 BPに近い。報文によれば、１号石棺墓下段の人骨（第３号）は伏臥伸展の状態で埋葬されており、サラサバテイが人骨の額部に頂部を押し当てた状態で検出されたという。このサラサバテイが年代測定試料と同じものかどうかは記載されていないが、仮に同一であるとすれば、石棺墓の下位に位置する伊波・荻堂式包含層に由来するものと解釈することができる[17]。

このほか、ガルマンドウ原洞穴では、縄文晩期～弥生前期前半に位置づけられる土器群とともに出土した人骨から、2,720 C14 BPの年代値が得られている。これは、志堅原や武芸洞の年代よりもやや古く、伴う土器群の年代観とは整合しない。何らかの要因で年代値が古く出ているか、墓地の形成が長期に渡り、年代値の得られた人骨と土器とが、本来共存するものではない可能性も考慮される。

以上のように、沖縄の縄文晩期について得られたC14年代測定値を見ていくと、おおむね土器編年と整合的な値が得られていることがわかる。日本本土における縄文時代晩期の年代については近年さまざまに議論されているが、宮地聡一郎氏（2009）の年

代観を参考にすると、仲原式の年代は、おおむね夜臼Ⅱb式・板付Ⅰ式期、すなわち弥生時代前期初頭を前後する頃に相当するものと推定できる。同時に、武芸洞や木綿原の石棺墓は、伴出する土器から年代を限定することは困難だが、C14年代値からは仲原式に伴う可能性が高いということになる。

かつて時津裕子氏（2000）は、沖縄・奄美諸島の石棺墓を「南島型石棺墓」と呼び、それらの諸属性について検討を行った上で、「九州弥生的と解釈可能なもの、南西諸島固有の伝統的なものが混在して南島型石棺墓が構成されている」と結論づけている。年代的に見て沖縄・奄美諸島の石棺墓は、九州弥生文化で支石墓の下部主体として見られる箱式石棺に重なるが、両者の間に直接的な影響関係を想定することは困難である。特に、沖縄・奄美における石棺墓の特質を考える上で、集落を離れた砂丘上への立地やモニュメント性、棺体の継続的な利用と更新など、それ以前の崖葬墓には見られない諸属性には特に注目しておく必要がある。埋葬後、埋め戻される土坑墓とは異なり、石棺墓には棺体上部が地表に露出していたと考えられる事例も認められ（沖縄県立博物館･美術館　2010）、棺自体を不特定の他者に顕示しようという意図が感じられる[18]。

沖縄諸島では仲原式以後、明刀銭（當眞　1997）や三翼鏃（仲宗根･小原　2006）、五銖銭、楽浪系土器などの大陸系文物が流入することが知られている（小田富士雄　2000）。また、弥生時代早期の刻目突帯文土器以後、弥生土器の流入も一定量認められるようになる（中園　2000、仲宗根・西銘ほか2001）。弥生系文物としては、鉄斧やガラス玉なども確認されており、仲原式以後の沖縄では、それ以前に比べて対外交流の痕跡が飛躍的に増加する。

一方、仲原式以前に見られる腰岳系黒曜石（小畑･盛本ほか　2004、山崎　2008）や糸魚川・青海産ヒスイの流通（新里　2007）は、縄文的な物流と観念の延長上にあるものと言え、仲原式期を前後する時期は、日本本土における縄文時代から弥生時代への転換期に対応した、変革の時代であったと見ることができよう。

3 遺跡群の概観

以下では、本稿の対象となる沖縄島南部の遺跡群に関連して、地形・地質および遺跡群の概要を記載する。なお、沖縄の遺跡立地と地質・地形との関わりについては、すでに安里嗣淳氏（2003、2004など）が詳しく論じており、本稿でも参考とした。

3―1 地形・地質

遺跡群の概要について記載する前に、沖縄島南部の地形・地質について必要最低限の範囲で言及しておきたい。

沖縄島南部の地質は、大きく見て砂岩、泥岩、凝灰岩などの海成堆積物からなる島尻層群（中新世～鮮新世）と、その上位に位置する琉球層群（琉球石灰岩:更新世）からなる（沖縄県教育委員会　2000）。島尻層群は不透水層、琉球層群は透水層であり、琉球層群の石灰岩段丘縁辺部ではしばしば湧水が見られる。沖縄では、一般的傾向として、こうした湧水に近接して遺跡が形成されることが多い。琉球層群は、沖縄島南部の糸満―具志頭―玉城―知念にかけて大規模な石灰岩地形を形成しているが、内陸部の東風平や南風原、東海岸の西原、与那原、佐敷では、琉球層群は部分的にしか分布せず、表層に島尻層群が露出している。

また、地形的に見ると西原、与那原、佐敷など東側の中城湾側では標高100mを越える急崖が形成されており、西側に向かってなだらかに傾斜している。このため、国場川や雄樋川など、比較的規模の大きな河川の流向は、東から西へ、あるいは北から南へと向かっており、中城湾側では規模の大きな河川は見られない。

現在の海岸部や河川流域には沖積層が発達しており、米須海岸や名城海岸では規模の大きな砂丘が発達している。弥生～平安並行時代の規模の大きな貝塚遺跡はこうした砂丘上に乗ることが多い。沖縄島における砂丘の形成過程については、伊礼原遺跡の事例について詳しい研究がなされており（松田　2007）、縄文海進最高潮期以後、徐々に砂丘の形成と拡大が進行したことが明らかにされている。

3―2 遺跡群の概要

次に、遺跡群の概要について見ていくことにしたい。本稿で取り上げる遺跡群について、第4表に一覧表を示し、第1図には主要遺跡の分布図を示した。

各遺跡の基本的データは、個別の発掘調査報告書や詳細分布調査報告書、宮城弘樹氏（2000）による貝塚後期遺跡の集成等に依拠している。今回は、58箇所の遺跡をリストアップした。

その内訳は、縄文時代早・前期２箇所、中期13箇所、後期22箇所、晩期16箇所、弥生～平安並行時代27箇所で、見かけ上は縄文後期と弥生～平安並行時代の遺跡が多い。しかし、遺跡数を年率19（遺跡数を各時期の年数で除した値）で見ると、見かけ上の遺跡数とは異なる結果が得られる。すなわち、縄文晩期が0.023で最も高く、後期の0．017、弥生～平安並行時代の0.015、中期の0.013がこれに次ぎ、縄文早･前期の0.001が最も低い。年率から見た場合、縄文早・前期の遺跡数が極端に少なく、中期で増加して以降、弥生・平安並行時代まで、著しい変化はない。このようなあり方は、高宮広土氏（1997）が提示した100年あたりの遺跡数変動グラフともよく調和している。ただし、厳密に遺跡群の動向を把握するためには、土器型式レベルでの遺跡数の検討が必要不可欠である。今回は時間的制約から十分な検討ができなかったため、今後の課題としたい。

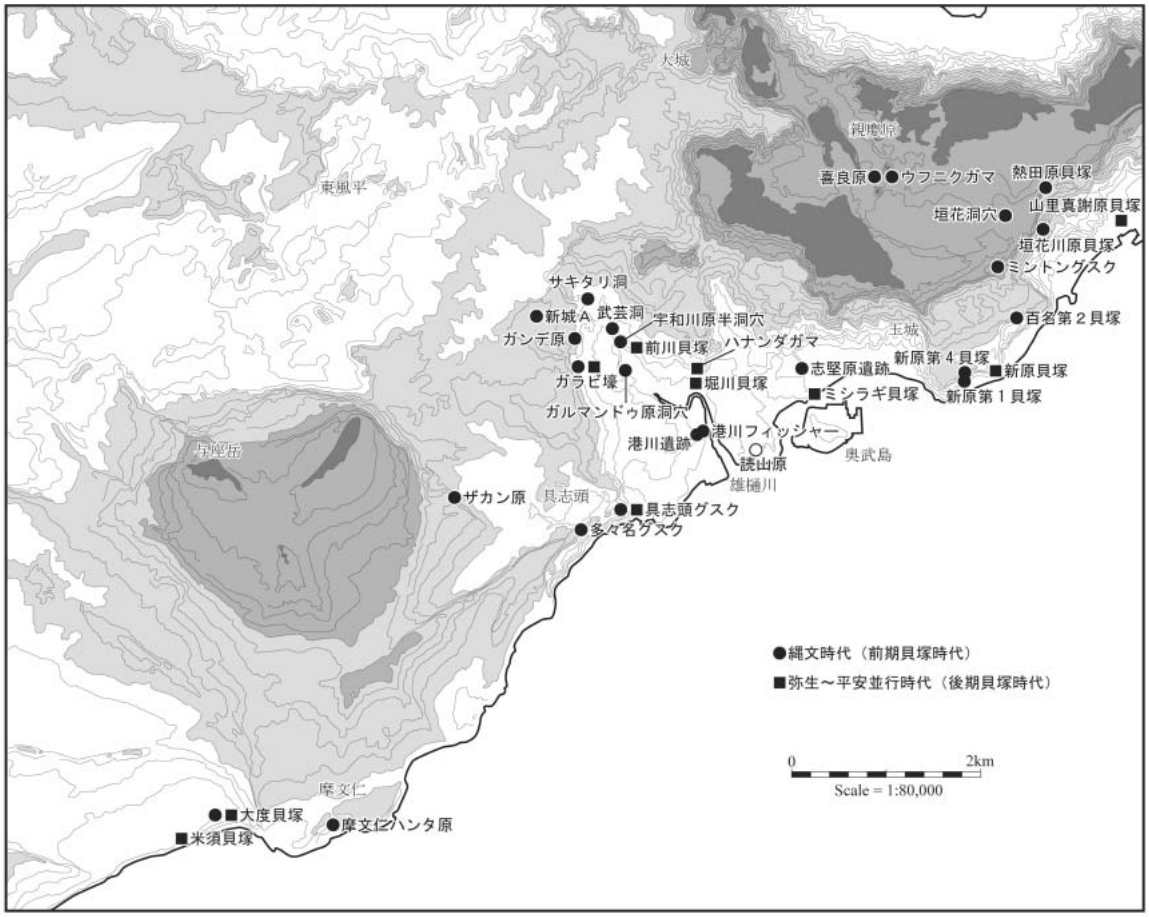
ところで、現在認識されている遺跡は、実際には本来存在する遺跡のごく一部であり、今後の調査によって遺跡数は増加の一途を辿ることが推定される。したがって、本稿で取り上げる遺跡の分布や立地が、どれだけ当時の実態を反映しているかという点は重要な問題であるが、とりあえず今回は、現状の遺跡分布がある程度当時の遺跡分布の実態を反映しているという前提に立った上で記述を進めたい。

次に、第１図を一見してまず注意されるのは、先史時代の遺跡がこの地域全体にわたって散漫に分布するわけではなく、分布に明瞭な粗密が認められることである。遺跡が集中する地区としては、①親慶原ドリーネ周辺、②志喜屋から垣花にかけての崖線沿い、③百名から新原にかけての沿岸部、④玉泉洞周辺、⑤具志頭グスク、港川、志堅原など、具志頭から奥武島にかけての沿岸部、⑥大度・米須海岸、⑦喜屋武から真栄里にかけての沿岸部（第１図の範囲外）などが挙げられる。こうした小規模な遺跡のまとまりは、おおむね１～２km程度の範囲内に集中する傾向が顕著で、生活に適した平坦面や湧水の存在など、時代を超えても特定の立地環境が好まれた

第4表　沖縄島南部の先史遺跡

地区		遺跡名	縄文時代				弥生～平安並行時代
			早期～前期	中期	後期	晩期	
知念半島	1	クルク原貝塚				○	
	2	下上原貝塚			○	○	
	3	山里真謝原貝塚					○
	4	具志堅ウージ洞穴	?	○	○	○	
	5	ヤローヤ洞穴					○
	6	熱田原貝塚			○		
	7	志喜屋貝塚			○		
大里	8	真手川原			○		○
親慶原	9	喜良原				○	
垣花	10	垣花					○
	11	垣花洞穴貝塚			○		
	12	垣花川原貝塚		○	○		
	13	ミントングスク				○	
新原･百名	14	百名第1貝塚					○
	15	百名第2貝塚		○	○		
	16	新原第1貝塚			○		
	17	新原第4貝塚				○	
	18	新原貝塚					○
奥武	19	志堅原		○		○	
	20	読山原				?	
	21	堀川貝塚					○
	22	ハナンダガマ					○
	23	ミシラギ貝塚					○
前川	24	前川貝塚					○
	25	宇和川原半洞穴		○			
	26	武芸洞	○	○	○	○	
	27	サキタリ洞		○		?	
糸数	28	根石グスク					○
新城	29	新城A			○		
	30	ガンデ原			○	○	
	31	ガルマンドゥ原洞穴				○	○
	32	新里塚					○
	33	十柱向い貝塚					○
	34	ガラビ塚		○			○
港川	35	港川				○	
具志頭	36	ザカン原		○	○		
	37	具志頭グスク			○	○	○
	38	具志頭グスク崖下	○			?	
	39	多々名グスク			○		
大度･摩文仁	40	摩文仁ハンタ原			○		
	41	大度貝塚		○	○		○
	42	米須貝塚					○
喜屋武･名城	43	喜屋武貝塚		○			○
	44	喜屋武遺跡		○		○	
	45	ジュランバル貝塚					○
	46	並里原			○	○	
	47	名城遺物散布地					○
	48	名城遺跡					○
	49	名城前原		○	○		
真栄里	50	フェンサ城貝塚					○
	51	川田原貝塚					○
	52	真栄里貝塚					○
兼城	53	兼城貝塚			○		
	54	兼城上原第1			○	○	
	55	兼城上原第2				○	
	56	稲嶺屋取					○
	57	照屋西原			○		
伊敷	58	轟洞穴					○
遺跡数			2	13	22	16	27
遺跡数の年率			0.001	0.013	0.017	0.023	0.015

※地区名は便宜的なものである。



第１図　遺跡群全体図

ことがうかがわれる。

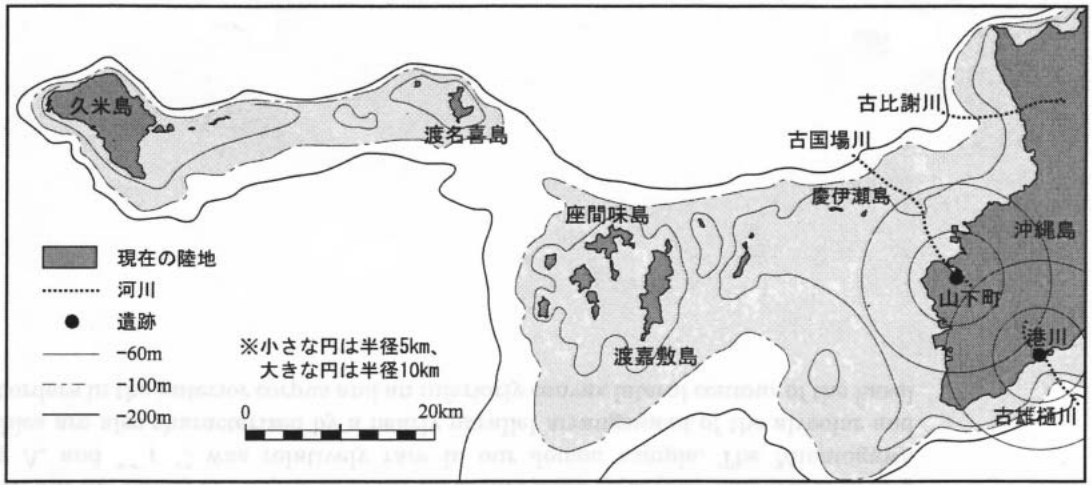
沖縄の先史遺跡が沿岸部に営まれること、しばしば貝塚を伴うことについては、すでに多くの指摘がある(安里　2003など)。ここで取り上げる沖縄島南部においても、規模の大きな遺跡は基本的に沿岸部に沿って分布する傾向が顕著であり、内陸部の開発が進むのはグスク時代以降のことである。

本地域において、明確な竪穴住居を伴う集落遺跡は知られていないが、百名第２、大度、米須、川田原、真栄里などでは規模の大きな貝塚が形成されている。やや内陸に入った熱田原、前川なども、これに準じる内容と見られる。

一方、親慶原ドリーネ周辺や玉泉洞周辺など内陸部に営まれる遺跡は、概して小規模なものが多く、武芸洞やハナンダガマ、ガルマンドウ原洞穴のような墓地遺跡が目立つ。こうした事実を総合すると、生活の拠点は沿岸部にあり、必要に応じて内陸部も利用するという、二項的な生活様式が浮かび上がってくるが､この点については後で詳しく取り上げる。

一方、海から隔たった内陸部には原則として先史時代の遺跡は分布しない。特に、東風平や南風原、与那原など、表層に島尻層が露出する地域では、先史時代の遺跡はほとんど知られていないが、これは湧水や沢が乏しいことに関係があるらしい（安里前掲)。グスク時代や近世の遺跡は内陸部にも分布するので、遺跡そのものが保存されづらいというわけではなく、やはり実態として遺跡分布が希薄であったと考えるのが自然である。グスク時代以降、遺跡が内陸部にも進出する背景には、農耕と水利技術の発達が重要な役割を果たしていたのだろう。

先史時代の遺跡分布の限界は、だいたい海岸線から直線距離で２～３km程度であり、最も内陸に位置する遺跡でも、容易に海まで日帰り可能な距離が維持されている。沖縄の先史時代人にとって、海は食料資源獲得の場というだけでなく、舟を使った人的交流や物資の流通、交易の場としても重要な役割を担っていたことが推測できる。



第２図　沖縄島・慶良間諸島・久米島と周辺海域の水深（目崎1985を参考にして作成）

４遺跡群の通時的変化

以下では、編年の項で述べた各時期別に、遺跡群の様相を見ていくことにしたい。

４―１後期更新世（第２図）

この時期に該当する遺跡は、山下町第１洞穴遺跡と港川フィッシャー遺跡である。港川フィッシャー遺跡は、現在では海岸線に近い石灰岩台地に位置するが、OIS２の最終氷期最寒冷期（LGM）には海水準は現在よりも100mほど低下していたと考えられており、沖縄島と慶良間諸島は陸続していた（第２図）（目崎　1985を参考にして作図）。この頃の港川は、海岸線から直線距離で５km程度内陸に位置していたと推定される。一方、山下町のⅢ～Ⅴ層の年代はOIS３に遡るもので、斉藤文紀氏（1998）は、OIS３の25,000～30,000 C14 BPの東シナ海の海水準について－60～90m程度を想定している[20]。したがって、32,000 C14 BPの山下町は、海岸線から10km程度内陸に位置していたことになる。

以上のような立地は、海岸線を好む縄文時代以降の遺跡立地からすれば、大変特異である。遺跡の現在の標高は、山下町が10m程度、港川が20m程度（フィッシャー上の台地平坦面）なので、海水準が低下していた当時の両遺跡は、古国場川や古雄樋川を望む標高100m前後の高地に位置していたことになる（目崎前掲）。これは、現在で言えば親慶原ドリーネ周辺のティーラガマや喜良原の立地に匹敵し、海へのアプローチはかなり険しいものであったことが推測できる。

山下町の人骨が出土した炭化物層（Ⅴ層）からは、カワニナ、鳥骨、魚骨、カニ等の動物遺骸のほか、石器の可能性が推定されている細粒砂岩（ニービ）礫などが出土している（高宮　1968、高宮・金武ほか1975、小田静夫　2003）。また、港川フィッシャー遺跡では港川人とともに回収された動物化石について詳細な調査研究が行われており、イノシシやヤンバルクイナ、アマミヤマシギなど森林性の動物相が復元されている（長谷川　2002）。こうした動物相は、そのまま当時の人類が利用できた資源のリストということになる。海産貝や魚骨などの海洋生物遺骸が検出されていないことは、遺跡立地とも関係しているように思われるが、少なくともこの時期には、縄文時代以降とは根本的に異なる生業戦略がとられていたと推定できるだろう。

４―２ＭＬ期（空白期）

ML期に該当する遺跡は、ティーラガマと港川上部である。両遺跡の年代は9,000～8,000 C14 BPで、縄文海進最高潮期以前に相当する。この時期の海水準については諸説があるが、古川博恭氏（1985）は那覇市における沖積層基底面に見られる浸食谷の構造や、沖積層の層厚等から１万年前の海面は現海面下40mにあったと推定している。古川氏は、那覇港の新港ふ頭第４バース付近のボーリング最下部の砂質泥層中（現海面下25m）から得られた海産貝（カキ）のC14年代値を9,190年前と報告しており、その

３m上位の泥質細砂中のサンゴ化石のC14年代値を7,690年前と報告している。このデータに基づくと、沖縄島南部における約9,000年前の海水準は、現海面下25～22m程度のレベルにあったものと推定される。

一方、8,000～9,000 C14 BPの海水準が現海面よりも20～40mほど低かったと仮定しても、海岸線の位置や輪郭は現在とさほど大きな違いはない。問題は、この時期の沿岸部にサンゴ礁がどの程度発達していたかという点であるが、新城下原第２遺跡の爪形文土器包含層（Ⅸ層）では、シレナシジミやイボウミニナが出土することから、遺跡周辺にマングローブが生育する干潟が分布していたことが推定されており、ヤコウガイやチョウセンサザエなどサンゴ礁棲の貝類も見られる（島袋　2006）。また、河名俊男氏らの具志頭海岸における完新世離水サンゴ礁の研究によれば、この地域のサンゴ礁は水深10～20mの平坦面を基盤にして7,600 C14 BP頃から上方に堆積を開始し、6，000　C14　BP頃までには第１期のサンゴ礁が形成された。そして、5,500～2,500 C14 BP頃には、その外側に第２期のサンゴ礁が形成されたと推定されている（河名･菅　1996、2002）。

このほか、港川フィッシャー遺跡の上部からは、サンゴ礁棲のイモガイ（クロフモドキ）が出土しており、その年代値は8,640 C14 BP（TKa－12090）と報告されている（具志頭村教育委員会　2002）。南城市ティーラガマでも、マングローブ棲のシレナシジミから9,785 C14 BP（PLD－14534）の年代値が報告されている（山崎・横尾ほか　2010）。

以上のデータを総合すると、10,000 C14 BP以降、6,000 C14 BP以前の沖縄島南部では、河口部にマングローブが分布し、沿岸部にはパッチ状にサンゴ礁が分布していた可能性が考えられる。港川フィッシャー遺跡が、河口に面した高台に位置すること、ティーラガマが内陸高所に位置することは、この時期の沿岸部の環境を推定する上で示唆的である。

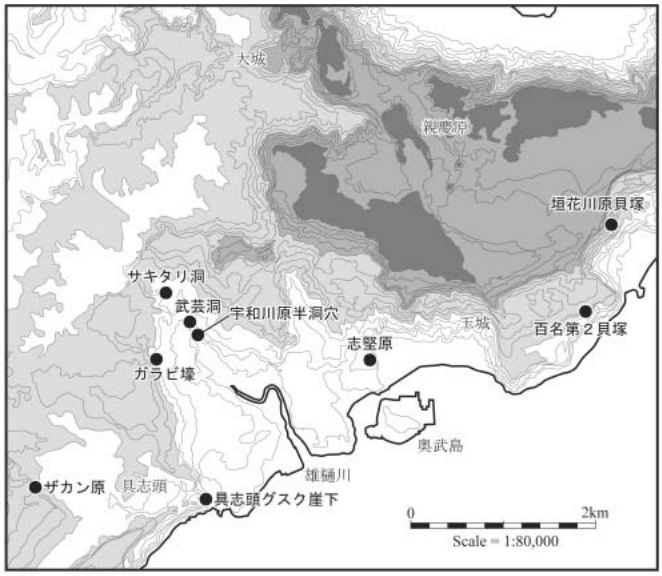
以上のように、ML期の景観や環境は次項で述べる縄文時代早期～中期の状況に準じる状態と言えるが、全体として見ればこの時期が、最終氷期最盛期（LGM）に続く環境の激変期であったことには十分注意しておく必要がある。特に、9,000 C14 BP以前の環境についてのデータは、現状では断片的であり、今後の調査研究の進展が望まれる。

４―３縄文時代早期～中期（第３図）

爪形文～面縄前庭式に相当する時期を一括した。C14年代では6,000～4,000 C14 BP前後に相当し、その前半は6,000 C14 BP～5,000 C14 BP頃の縄文海進最高潮期に相当する。現在知られているデータに拠る限り、この時期に属する遺跡数は少なく、規模も小さい。

爪形文期として確実な遺跡は武芸洞、具志頭グスク崖下の２遺跡のみであるが、条痕文～室川下層式では宇和川原半洞穴、武芸洞、サキタリ洞、ガラビ壕、喜屋武貝塚、名城前原の７遺跡がある。宇和川原の土器については、轟B式末のいわゆる「プロト曽畑」に関連するという指摘がなされたこともあるが（高宮　1991）、筆者は曽畑式と面縄前庭式の間に位置づけられる可能性を考えておきたい。

面縄前庭式ではやや遺跡数が増加し、ウージ洞穴、垣花川原、百名第２、志堅原、宇和川原、武芸洞、サキタリ洞、大度貝塚、喜屋武貝塚、喜屋武遺跡、名城前原の10遺跡がある。以上の遺跡のうち、遺構が確認されているのは武芸洞の面縄前庭式期（炉址）のみで、このほか喜屋武貝塚では、ビーチロック中から室川下層式期と推定される人骨が出土している（新田　1976）。



第３図　縄文時代前半（早期～中期）の遺跡分布

この時期の遺跡として、比較的実態が明らかとなっている武芸洞では、土器や石器等の人工遺物は乏しいものの、爪形文期の包含層からは野国Bや新城下原第２などと同様に多量のイノシシ骨が出土しており、面縄前庭式包含層には多量の破砕貝が含まれ、小貝塚のような状況を呈していた（沖縄県立博物館･美術館　2010）。したがって、武芸洞は定住的な居住地と言うよりも、一時的な野営地あるいは作業場として利用された可能性が考えられる。

一方、喜屋武貝塚は、現在でも海岸に面した砂丘上に位置しているが、この遺跡の室川下層式期の包含層はビーチロック中にあり、当時も潮間帯に位置していたことがわかる。室川下層式包含層の上位には、弥生～平安並行時代の包含層が重複しており、時代を違えながらも同一地点が繰り返し利用されていたようである（新田前掲）。ビーチロック中から検出された人骨が、確かに室川下層式に伴うものであれば、この時期の拠点的遺跡として位置づけることもできそうであるが、現状ではこれ以上の議論は不

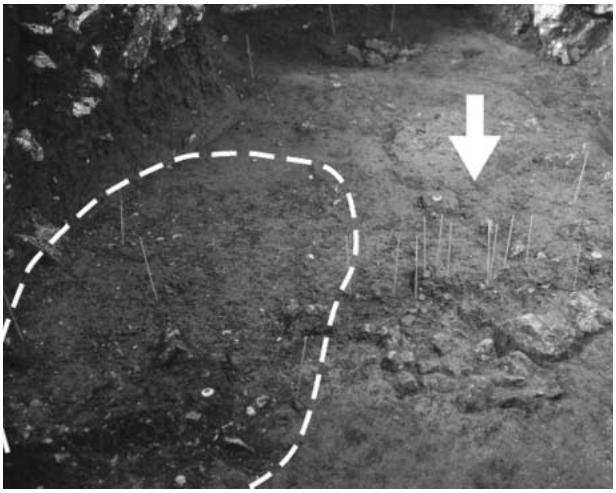
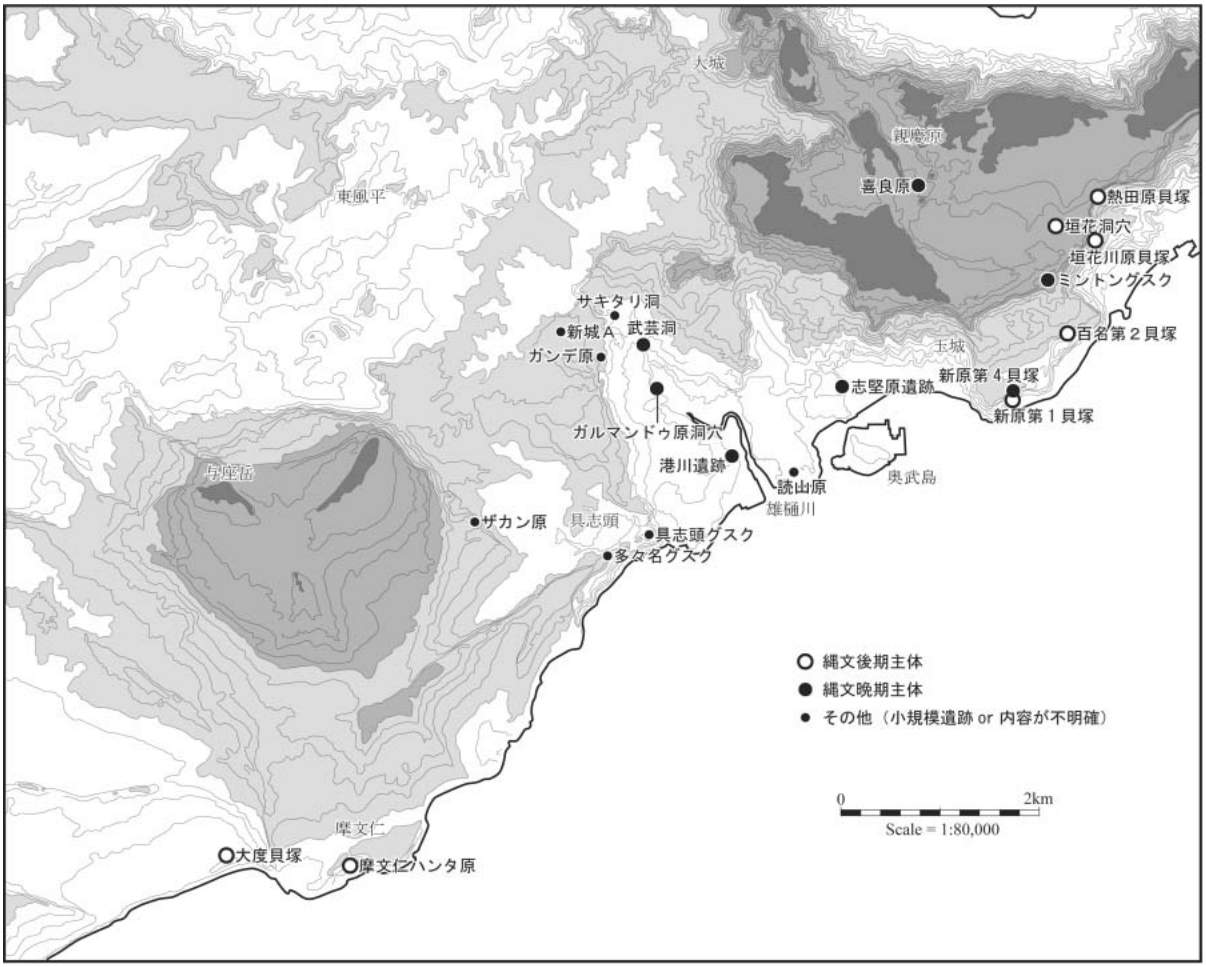


写真１　武芸洞遺跡の面縄前庭式期の石敷炉
（SF７：矢印）と破砕貝集中（破線部分）



第４図　縄文時代後半期（後・晩期）の遺跡分布

可能である。

全体として見ると、この時期の個々の遺跡内容は、後期以降に比べて不明瞭な部分が多く、遺跡規模や遺物量も貧弱である。一般の開地遺跡に対して、洞穴・岩陰遺跡が占める比率も高く、小規模な集団による移動性の高い生活様式が想定される。近年、北谷町伊礼原遺跡では大規模な発掘調査によって、この時期の拠点的遺跡の様相が明らかになりつつあるが、それによれば台地崖線の湧水点から汀線にかけての低地部が活発に利用されていたようである。こうした立地は喜屋武貝塚などにも共通しており、沿岸部での活動を主体としながらも、内陸部にも小規模な遺跡が残されるような生業システムが存在したことが予想される[21]。

４―４縄文時代後・晩期（第４図）

C14年代では4,000～2,500 C14 BP前後に相当する。後期前葉の仲泊式は大度貝塚や真手川原などで少量出土しているのみであるが、縄文後期の墓地（崖葬墓）とされる摩文仁ハンタ原では、人骨から3,800～3,700 C14 BPの縄文後期前葉に相当する年代値が得られている（松下編　2009）。人骨に伴出した土器は大山式とのことであるが、人骨の年代値自体は仲泊式や面縄東洞式に対応するものと見て良い。この時期には、近隣の大度貝塚で遺物の出土が知られており、面縄前庭式、仲泊式、面縄東洞式の包含層から出土した貝について、3,700～3,400 C14 BPの年代値が得られている（糸満市教育委員会　2003）。したがって、ハンタ原は大度貝塚に居住した集団の墓地として位置づけることができるかも知れない[22]。ハンタ原の例は、この時期に居住地から墓地が分化し始めたことを示す点で、大変重要である。

続く伊波・荻堂式期の代表的遺跡として、熱田原貝塚、志喜屋貝塚？、垣花川原貝塚、百名第２貝塚、新原第１貝塚、兼城貝塚などがある。この時期の集落は未確認であるものの、熱田原や百名第２では遺物量も豊富で、フィッシャー内には厚い包含層が残されており、貝塚らしい貝塚と言える。こうした遺跡は、当時の遺跡の中でも拠点的な位置を占めていたと推定される。

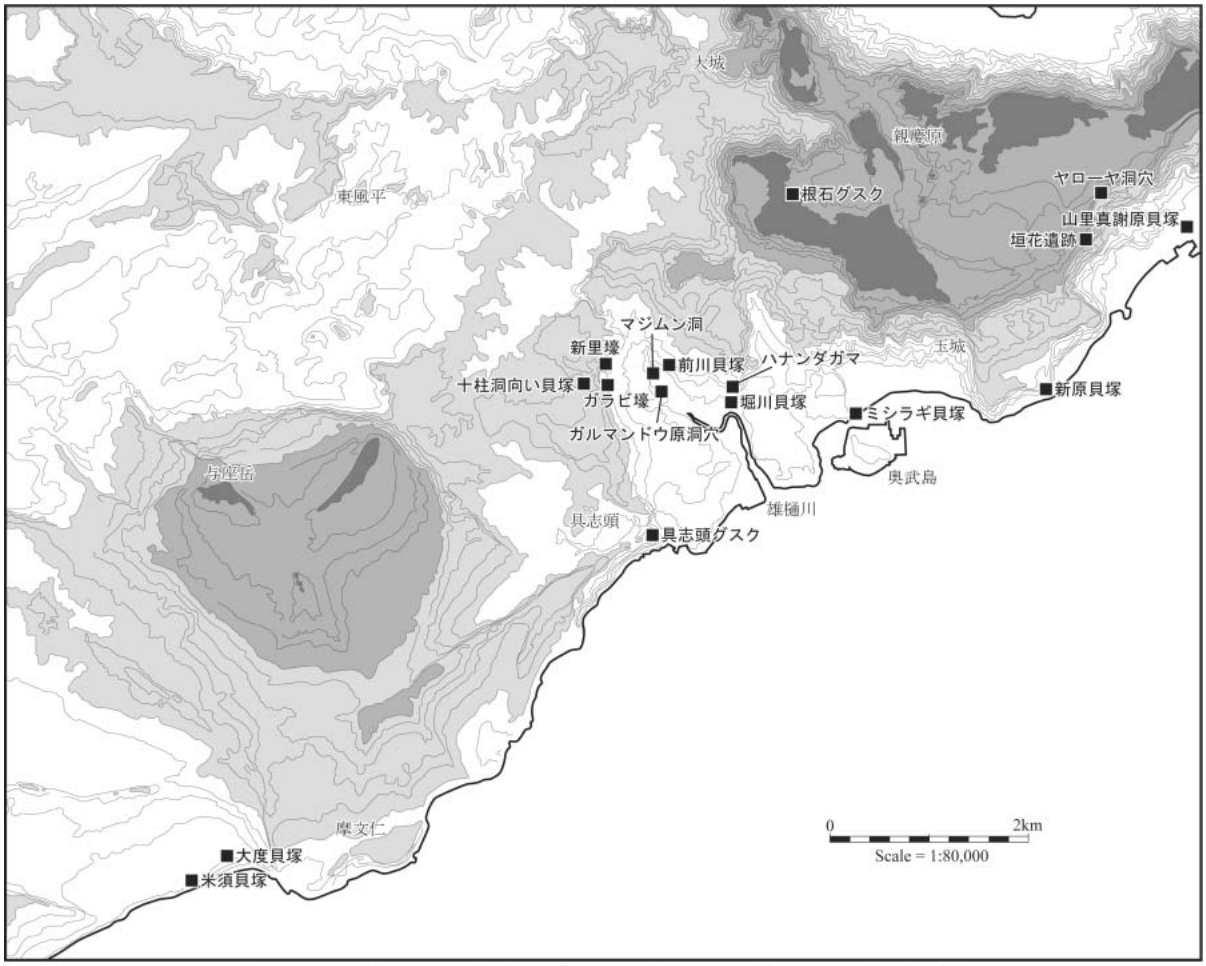
遺跡分布から見ると、上記の伊波・荻堂式期の主要遺跡は、熱田原から新原にかけての海抜高度の高い石灰岩台地の崖線沿いに集中しており、湧水を強く意識した占地となっている[23]。一方、奥武島から雄樋川にかけては、伊波・荻堂式期の遺跡分布は希薄であるが、この地域は表面に島尻層が露出した部分が多く、また石灰岩が分布するガンガラーの谷や玉泉洞周辺でも、石灰岩層が非常に厚いため、湧水に乏しい条件下にある。こうした地形環境が、遺跡分布にもある程度関与しているものと見られる。

続く大山式や室川式では規模の大きな遺跡は知られていない。下上原貝塚は実態が明らかでないが、時期的には熱田原貝塚とクルク原貝塚の間に入り、この頃に相当するものと思われる。

晩期の宇座浜式・仲原式期の主要遺跡として、クルク原、新原第４貝塚、志堅原、喜屋武、兼城上原などがあり、志堅原では土坑が確認されている。港川や読山原、ミントングスクなども実態は不明であるが、これに準じる遺跡と見られる。ガルマンドウ原洞穴（松下孝幸編　2007）や武芸洞はこの時期の墓地遺跡であり、志堅原や港川、読山原の居住集団によって営まれたものと推定される。また、詳細は不明であるが具志頭グスク崖下の崖葬墓（山崎・新里ほか　2009）も、この時期に属する可能性がある。ハンタ原の例に続き、この時期にも墓地が居住地から独立して営まれている点は、当時の集落形態を考える上で大変重要である。

この時期の遺跡分布は、伊波・荻堂式期とは異なり、奥武島～雄樋川流域にかけても分布を広げる。喜良原のように、かなり内陸部にも遺跡が見られることも、この時期の特徴であろう。こうした遺跡立地の差異を生み出した要因については、現在のところ検討材料があまりないが、従来遺跡分布の空白域であった地域への進出という点では、生業形態の変化、多角化を伴っていた可能性が考えられよう。

以上のように、この時期には沿岸部の拠点的な生活遺跡と、内陸部の墓地遺跡が明確に分化するようになる。拠点的遺跡の中には、規模が大きく遺物量の豊富なものもあり、貝塚らしい貝塚も見られるようになる。前代に比べて生活遺跡の規模や質自体にも一定の発展が認められるようである。また、縄文時代前半期の内陸部の洞穴・岩陰遺跡が、短期的な生活址と考えられるのに対して、この時期の洞穴・岩陰遺跡には墓地として利用されたものが目立つこ



第５図　弥生～平安並行時代（後期貝塚時代）の遺跡分布

とは､大きな特徴と言えよう。生活拠点が固定化し、短期的な野営地が必要なくなったこと、定住性の強化に伴って、特定集団の開発領域が固定化したことが背景にあるのかも知れない。特に、伊波・荻堂式期および宇座浜・仲原式期の遺跡が、およそ２～３km程度の範囲の中に集中して見られることは、開発領域の固定化を思わせる。

ところで、この時期に見られる崖葬墓は、かつては埋葬・改葬という図式で理解されることが多かった（木下・中村　1979、高宮　1993a)。しかし、近年の土肥直美氏とそのチームによる一連の調査研究によって、沖縄の先史時代にも、遺体を埋葬せずに骨化させる、近世の風葬墓に近い形態の墓（遺体を岩陰に安置し、骨化後に集骨する墓）が存在したことが実証されつつある（土肥　2008a、片桐･小橋川ほか　2007)。一般に沖縄の先史時代の崖葬墓からは、数十個体程度の骨格（破損した部分骨である場合が多い）が検出されることも稀ではない。このような墓は一種の集団墓[24]と言え､この時期にこうした集団墓が確立することは、当時の社会を考える上で重要と思われる。

土肥氏らの研究に基づけば、崖葬墓は通常の土坑墓とは異なり、骨が地表に曝露された墓であることから、不特定の他者への顕示を意識した墓制とも言える。さらに進んで、崖葬墓を単なる墓としてではなく、土地の占有を他者に顕示するための装置と捉えることも可能であろう。一般に、グスク時代以降の崖葬墓は忌避の対象とされている場合が多く、生者と死者の区別が強く意識されているようであるが(西銘　2008)、上述のように、先史時代の崖葬墓の立地にはしばしば生活に適した（かつては生活の場として利用されていた)洞穴や岩陰が選ばれており、そこには他集団の進出に対する防御的な意味合いが暗示されているように思われる[25]。筆者は縄文中期以

降、定住性の強化とコミュニケーション密度の増加に伴って集団間の緊張が高まる中で、こうした集団墓が造営された可能性を考えたい。

４―５弥生～平安並行時代（第５図）

2,500 C14 BPから12、13世紀頃までを一括した。この時期の代表的遺跡として、山里真謝原貝塚、新原貝塚、ミシラギ貝塚、堀川貝塚、前川貝塚、大度貝塚、米須貝塚、喜屋武貝塚、ジュランバル貝塚、名城、川田原貝塚、真栄里貝塚、フェンサ城貝塚など沿岸部の貝塚遺跡が挙げられ、特に砂丘上に乗る遺跡が増加する点に特徴がある。これらの遺跡には、数千～１万㎡を超える規模の広がりをもつものも含まれており、遺物量も多い。

この時期の主要遺跡は、海岸線沿いに連なるように分布しており、縄文時代に見られたような特定地域への偏りは見られないようである。地形的に区画された単位となる志喜屋、新原、奥武、大度、喜屋武、名城、真栄里の各砂丘には、それぞれ１～２箇所の主要遺跡が均等に分布しており、砂丘と前面のリーフを生業領域とした定住的な居住集団が想定される。

一方、こうした生活遺跡に対応する墓地遺跡については、現在のところ不明であるが、ハナンダガマから出土した人骨からは990 C14 BPの年代値が得られており（沖縄県立博物館･美術館　2009）、武芸洞では1,010 C14 BP～660 C14 BPの年代値が得られた人骨（崖葬墓）が出土している（沖縄県立博物館･美術館　2010）。これらの年代値については、海洋リザーブ効果等も考慮する必要があるが、年代値そのものはフェンサ下層式～グスク時代頃に相当する（名島・安斎ほか　2008）。この時期には、新里壕、ガラビ壕、ヤローヤ洞穴など、内陸部の洞穴遺跡もいくつか知られており、うるま市具志川グスク崖下（土肥　2008）などで知られるように、そのような場所が崖葬墓として利用された可能性も十分考えられる。

５議論

以上、沖縄島南部における先史遺跡の分布と立地について、通時的に概観した。以下では、そこから派生する二三の問題について検討を加えるとともに、今後の課題を述べてみたい。

５―１沖縄島南部における先史時代人の生業形態と定住性

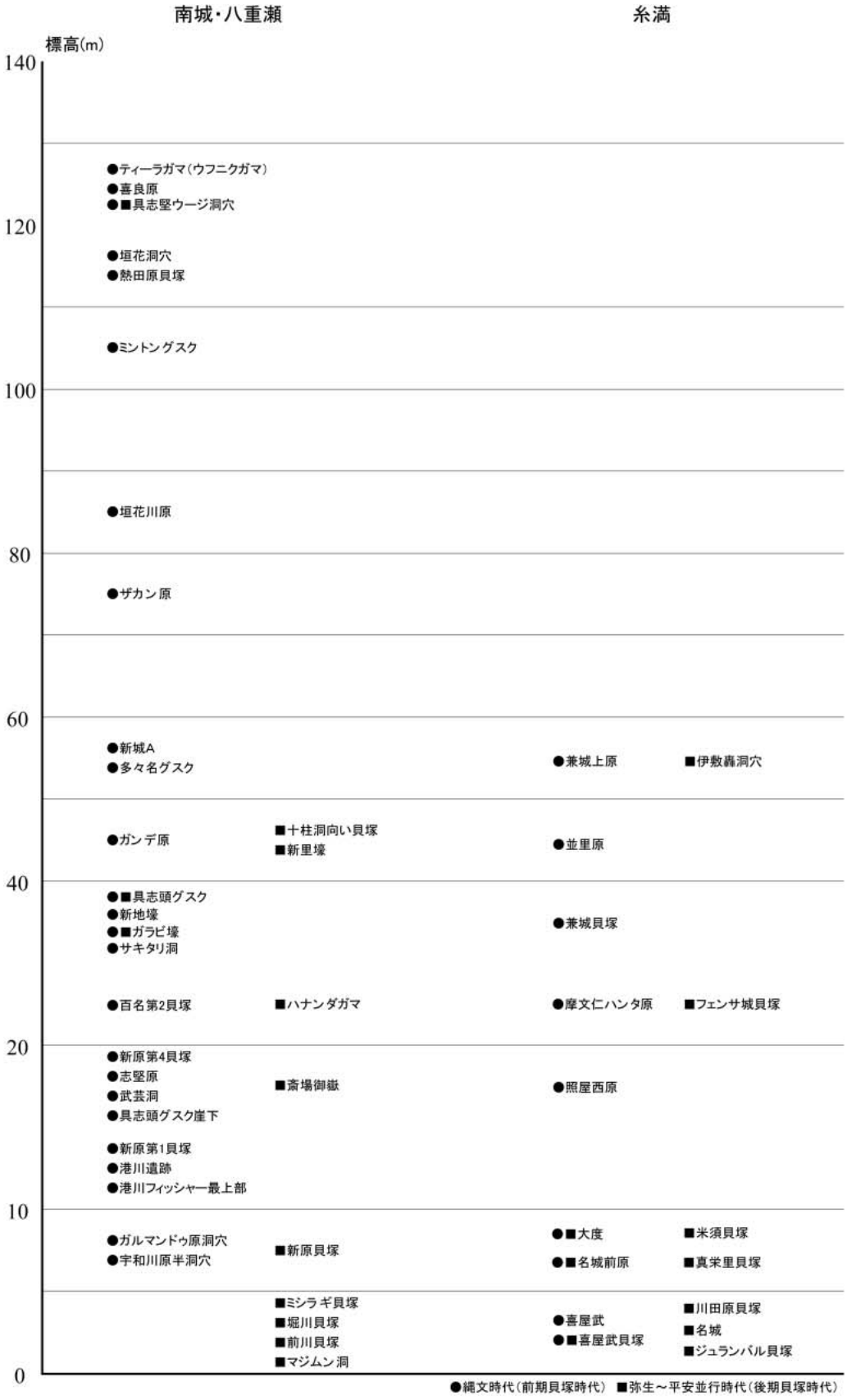
はじめに、沖縄島南部における先史時代人の生業形態と定住性の問題について検討しておきたい。この問題について、最もデータが豊富なのは縄文時代後・晩期および弥生～平安平行時代である。この時期は、遺跡数も多く、規模・内容ともに充実した明瞭な拠点的遺跡が形成されている。

この時期の拠点的遺跡からは、多くの動物遺存体が出土しているが、縄文後期の熱田原貝塚では、カニ類（オカガニ、モクズガニ等）、魚骨（ブダイ類、ハマフエフキ、ハタ類）が多く、リュウキュウイノシシ、オオコウモリ、ケナガネズミ、リュウキュウヤマガメなどが同定されている（金子　2002）。貝類ではアラスジケマン、リュウキュウナミノコ、イソハマグリが多い（大城　2002）。弥生～平安並行時代の大度貝塚では、ブダイ類、ハタ類、ハマフエフキ、リュウキュウヤマガメ、ケナガネズミ、リュウキュウイノシシなどが同定されている（金子　1998）。貝類ではチョウセンサザエ、マガキガイ、シラクモガイ、コオニコブシなどが多い（湖城　1998）。

以上のように、熱田原、大度ともに、全体として見ると魚類、貝類が多く、陸獣が加わる。熱田原ではカニ類も多く、タンパク源としてさかんに利用されていたのであろう。いずれにせよ、両者の間に本質的な差異は見出せない。

一方、植物遺体については沖縄島南部では検出例が乏しい。本地域と同様に、石灰岩地帯に位置する北谷町伊礼原遺跡低湿地区の曽畑式包含層では、大量のシイ属の果実とともに、ブナ科のアカガシ亜属に属するオキナワウラジロガシ、ウラジロガシ、ウバメガシ、マテバシイ属の果実などが出土しており、現在、沖縄島北部に見られるようなシイ属、マテバシイ属、アカガシ亜属からなる照葉樹林が遺跡周辺にも広がっていたことが指摘されている（辻・大松ほか　2007）。したがって、沖縄島南部にもそのような植生が分布していた可能性がある。

以上のように、縄文時代後・晩期から弥生～平安並行時代にかけては、海産の魚類、貝類を中心として、イノシシなどの陸獣、植物資源なども利用する



第 6 図　沖縄島南部の先史遺跡の標高

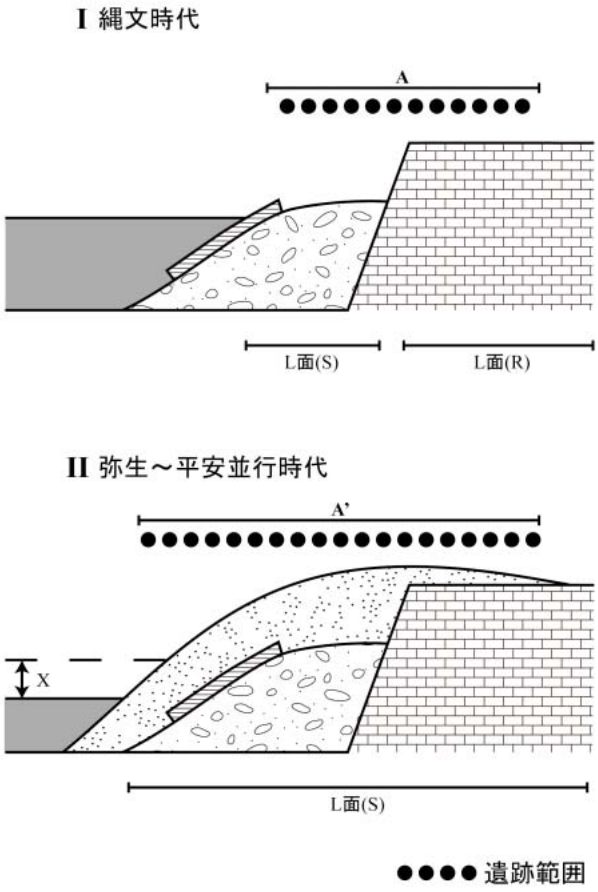
漁猟採集の生業形態が復元できる。

次に、こうした拠点的遺跡に居住した人間集団の定住性の問題について考えてみたい。先に、縄文後・晩期の遺跡群の様相について検討する中で、この時期の主要遺跡の分布に地域的偏りが見られることを指摘した。特に、伊波・荻堂式期や宇座浜・仲原式期では、2～3kmの範囲内に複数の主要遺跡が集中しており、この集中範囲の外には遺跡はほとんど分布しない。こうした分布のあり方から見て、日常的な交流（日帰り程度の交流）は、もっぱら2～3km程度の範囲の中で行われたと考えられ、この規模を超えるような集団移動（移住）が頻繁に行われたとは考え難い。先に述べた遺跡出土の食料残滓から復元される生業圏も、こうした遺跡分布のあり方と調和的である。

また、この時期には摩文仁ハンタ原やガルマンドウ原洞穴、武芸洞のように、累代的な使用が想定される墓域（集団墓）も形成されており、この点から見ても数年～数十年程度のタイムスケールで、大規模な集団移動（移住）が行われていたことを想定することは不可能であろう。

以上のことから、縄文時代後・晩期においても、定住性は相当に強固なものであったと推定される。こうした状況は、続く弥生～平安並行時代になると、さらに鮮明となる。この時期には、海岸線に沿って拠点的遺跡が均等に並び、沿岸部が個々の遺跡によって割拠されるという現象が見られる。こうした状況では、個々の拠点的遺跡に対して想定される集団領域はいっそう限定され、集団移動もまた制限されることになったであろう。

これに対して、縄文時代早期～中期の状況はどうだろうか。この時期には、まとまった量の遺物が発見される遺跡は稀で、土器片が数点から数十点発見される程度の遺跡が多い。縄文後・晩期に比較して、相対的に移動性が高かったものと思われる。ただし、この時期にも沖縄島中部では野国Bや伊礼原、古我地原のように、強固な定住性をうかがわせる規模の大きな遺跡も知られており、沖縄島南部でも今後の調査の進展によって、こうした遺跡が発見される可能性は残されている。



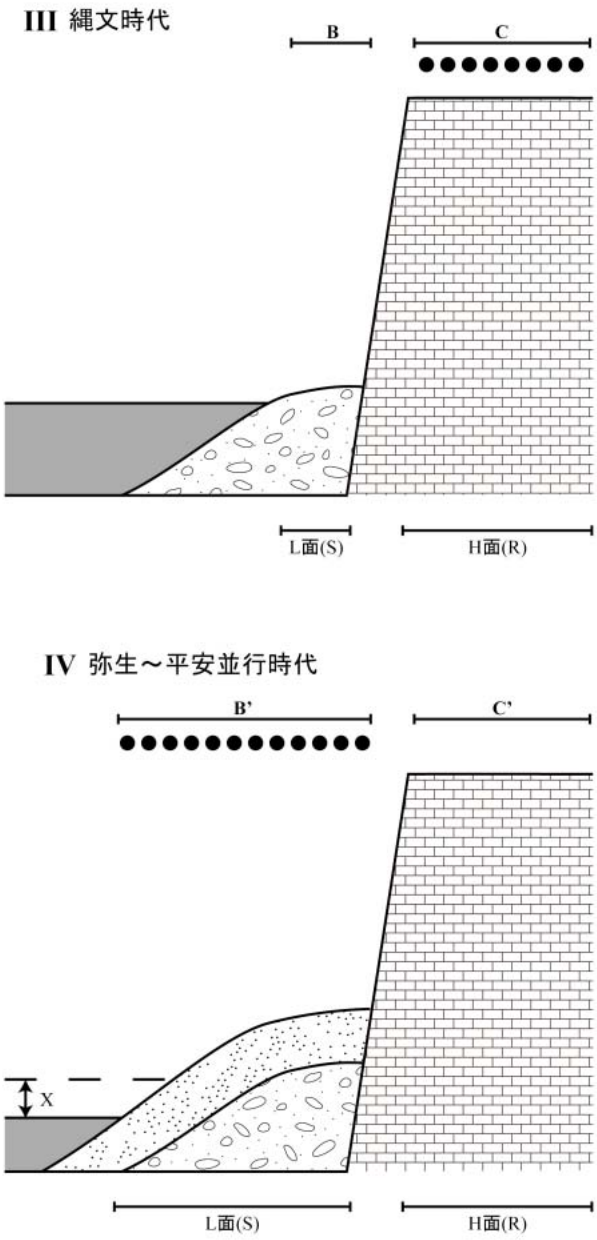
第7図　海水準変動・砂丘形成と遺跡①

5―2 海水準変動・砂丘形成と遺跡立地

次に、海水準変動や砂丘形成といったマクロな環境変化と遺跡との関わりについて検討しておきたい。

第6図には、沖縄島南部における主要遺跡の標高を示した。この図を一見すると、南城方面には標高の高い場所に遺跡が多いことがわかる。

一方、低地の遺跡に注目すると、糸満方面では、喜屋武や名城、大度のように同一地点で縄文時代と弥生～平安並行時代の遺跡が重複する例が目立つ。特に、喜屋武貝塚では室川下層式を包含する海抜約2.5mの離水ビーチロック（厚さ2m以上）の上面を弥生～平安並行時代の包含層が覆っている（新田1976）。これに対して南城方面では、縄文時代の遺跡と弥生～平安並行時代の遺跡が同一地点で完全に重複する例は知られていない。縄文時代から弥生・平安並行時代にかけての遺跡が密に分布する新原・百名でも、各時代の遺跡はわずかに地点を移動しながら営まれており、沿岸砂丘上に遺跡が進出するの



第８図　海水準変動・砂丘形成と遺跡②

は弥生～平安並行時代以後のことである。端的に言うと、縄文時代から弥生～平安並行時代にかけての遺跡立地は、糸満方面では連続的であるが、南城方面では不連続的であるように見える。このような時代ごとの遺跡立地に見られる地域的差異は、なぜ生じたのであろうか。

この問題の解明には、自然環境と人類活動両面からのアプローチが必要と思われるが、環境変化がその主たる要因であったと考えるならば、その要因としては、隆起運動や砂丘形成、津波などが考えられる。

沖縄では、縄文海進最盛期以降の隆起運動に関するデータは比較的多く蓄積されており、河名俊男氏(1988)は離水ノッチの後退点高度から、沖縄島南部では2400年前頃に最大2.5mの隆起運動が起きたことを指摘している。また、隆起運動との関係は不明確であるが、沖縄島中南部では、縄文海進最高潮期に現在よりも海面が１～２m程度高かったことを示すデータが多い（古川　1980、松田　2007、片桐　2006など)。

一方､沖縄島における縄文海進最高潮期の年代は、地域によって多少の差異が認められるようである。読谷村渡具知東原や北谷町伊礼原では、爪形文期が海進最高潮期に相当することが推定されており、海水準のピークは現海水準よりやや高い位置まで到達した。続く曽畑式期は海退期に入っていたとされる(古川前掲、松田前掲)。一方、伊礼原に近い宜野湾市新城下原第２の爪形文文化層（Ⅸ層）は標高０～－１mに位置するが、堆積当時は陸域または陸水域であったらしい。この遺跡では、海進最高潮期はⅨ層の上位に位置するⅧ層段階（5,525 C14 BP）であったと推定されている(片桐前掲)。また、名護市大堂原貝塚では「地殻変動がなかったとすれば約6,000y cal BP頃の海水準は現在よりも約２m低く、5,000y cal BP頃には海水準は現在と同じレベルに到達していた」と考えられている(小元　2007)。このように、縄文海進最高潮期の年代と海水準は、サイトごとに異なっているようであり､その背景には、大局的的な海水面の上昇だけでなく、地殻変動やハイドロアイソスタシーなど、さまざまな要因を考慮する必要がある。

沖縄島南部に限って見ると、縄文海進最高潮期以後の隆起運動あるいは縄文海進最高潮期の高海水準を示すデータは、八重瀬町具志頭海岸の離水サンゴ礁や離水ノッチを代表例として、各地から報告されている。先述の糸満市喜屋武貝塚における室川下層式土器を含む離水ビーチロックは、考古編年からも年代を特定できる点で特に重要なものである。

以上のデータからは、縄文海進最高潮期以後の隆起運動あるいは縄文海進最高潮期の高海水準は、沖縄島南部一帯でほぼ同様な傾向を示していると見る

ことができる。したがって、隆起運動によって遺跡立地の地域的差異が生み出されたと考えることはできない。

そこで､次に砂丘形成の問題を検討しておきたい。現在の地形を詳しく見ると、南城方面では標高の高い石灰岩台地が広く発達しており、遺跡が多く分布する沿岸部や河川沿いには険しい崖線が続いている。一方、糸満方面では、特に沿岸部において海水面との比高差の小さい低平な石灰岩台地が広く分布しており、遺跡もこうした台地縁辺部から海浜部にかけて形成されている。このような地形環境から見て、糸満方面では、低平な台地の縁辺および隣接する砂丘にかけて、居住活動に適した広い平坦面（第７図A）を確保することができるが、縄文時代の南城方面では、まだ低地部分での砂丘の発達が十分でなく（第８図B)、弥生～平安並行時代に砂丘が発達して以降、低地に遺跡が進出した（第８図B’)、と推定することができる。

いずれにせよ、弥生～平安並行時代の遺跡が沿岸部の砂丘上に営まれる点は、糸満方面でも南城方面でも共通しており、この時期に砂丘が発達するような状況が生じたのは確かであろう。河名俊男氏(2006) は、具志頭海岸や津堅島など、沖縄島東南部の離水ビーチロックやサンゴ礁岩塊の分析から、3,400 cal BP頃に沖縄島東南海岸に大波（猛烈な台風の高波あるいは津波）が襲来し、具志頭海岸では砂層が打ち上げられ、その後ビーチロック化したこと、2,325～2,658 cal BP頃の海水準は、現在よりも若干低かったことなどを指摘している｡いずれも、沖縄島南部における弥生～平安並行時代の遺跡立地や砂丘形成を理解する上で重要な指摘であろう。

６結語

本稿では、沖縄島南部における先史遺跡の分布と立地について検討を加えた。今回取り上げた論点の多くは、従来から指摘されてきたことを再確認したに過ぎないが、以下に要点をまとめておく。

① 更新世の遺跡立地は、縄文時代以降の沿岸部を好む遺跡立地とは根本的に異なっている。
② ML期の遺跡立地は、縄文時代早期～中期のあり方に近いと言えるが、不明な点が多い。
③ 縄文時代早期～中期では、遺跡規模は小さく、移動性の高い生活形態が想定される。
④ これに対して、縄文時代後・晩期の主要遺跡は２～３km程度の範囲内への集中が顕著で、遺跡規模も増大する。また、生活遺跡から墓地が分化する。
⑤ 縄文時代後・晩期には、遺跡の分布範囲が限定されること、累代的な墓地が形成されることから、相当に強固な定住性が確立していたと考えられる。
⑥ 続く弥生～平安並行時代には、拠点的遺跡の数や規模、内容に一層の充実が認められ、さらに定住性が強化されたと考えられる。
⑦ 沖縄島南部では、縄文時代から弥生～平安並行時代にかけて低地で砂丘が発達した。この間の過程について、糸満側と南城側では若干の相違が認められるが、これは両地域における遺跡立地の差異を生み出す素地を提供することになったと考えられる。

本稿をまとめるにあたり安座間充、新垣義夫、伊藤　圭、伊藤慎二、大岡素平、大城逸朗、大城秀子、尾方隆幸、片桐千亜紀、神谷厚昭、金城　達、相美伊久雄、新里貴之、新里尚美、高橋　巧、土肥尚美、仲里　健、藤田祐樹、横尾昌樹の諸氏にはさまざまに御教示、御援助いただいた。末筆ながら記して謝意を表したい。

参考文献

安里嗣淳　1992 「先史沖縄諸島人の交通」『史料編集室紀要』第17号　沖縄県立図書館史料編集室
安里嗣淳　2003 「総説」『沖縄県史』各論編２考古　沖縄県教育委員会
安里嗣淳　2004 「泉と小川―先史沖縄島の居住地選択―」『沖縄埋文研究』２　沖縄県立埋蔵文化財センター
安座間充･知念勇　2010「沖縄諸島遺跡の立地（Ⅰ)」『ガラマン』16　宜野座村立博物館
奄美考古学研究会編　2003 「宇宿小学校構内遺跡発掘調査報告」『奄美考古』第５号
伊藤　圭　2007a 「南島爪形文土器文化研究史」

『沖縄埋文研究』5　沖縄県立埋蔵文化財センター
伊藤　圭　2007b「沖縄県における南島爪形文土器以前の土器相」『九州における縄文時代早期前葉の土器相』第17回九州縄文研究会福岡大会　九州縄文研究会
伊藤　圭　2008「いわゆる野国タイプを考える―南島爪形文土器の出自についての一考察―」『文化財学としての考古学』泉拓良先生還暦記念論文集　泉拓良先生還暦記念事業会
伊藤慎二　2000『琉球縄文文化の基礎的研究』未完成考古学叢書2　ミュゼ
伊藤慎二　2008「琉球縄文土器（前期）」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
糸満市教育委員会　1981『糸満市の遺跡―詳細分布調査報告書―』糸満市文化財調査報告書第1集
糸満市教育委員会　1986『川田原貝塚』糸満市文化財調査報告書第7集
糸満市教育委員会　1996『真栄里貝塚ほか発掘調査報告』糸満市文化財調査報告書第16集
糸満市教育委員会　1998『大度貝塚』糸満市文化財調査報告書第14集
糸満市教育委員会　1999『真栄里貝塚発掘調査報告書』糸満市文化財調査報告書第16集
糸満市教育委員会　2003『大度貝塚ほか発掘調査報告』糸満市文化財調査報告書第19集
うるま市教育委員会･イーエーシー　2008『平敷屋トウバル遺跡―ホワイトビーチ地区内機材倉庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―』
大里村教育委員会　2005『真手川原遺跡』大里村文化財調査報告書第6集
大嶋和雄　1980「沖縄群島周辺の海底地形からみた第四紀後期の低海水準」『第四紀研究』18⑷　日本第四紀学会
大城逸朗･野原朝秀　1977「琉球列島における鹿化石産出地について」『沖縄県立博物館紀要』第3号　沖縄県立博物館
大城秀子　2002「貝類遺存体」『熱田原貝塚発掘調査報告書』知念村文化財調査報告書第10集　知念村教育委員会
大塚裕之･中村俊夫･太田友子　2008「琉球列島における脊椎動物化石包含層のC14年代」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』XIX　名古屋大学
沖縄県教育委員会　1978『沖縄県洞穴実態調査報告I』沖縄県天然記念物調査シリーズ第14集
沖縄県教育委員会　1984『野国貝塚群B地点発掘調査報告』沖縄県文化財調査報告書第57集
沖縄県教育委員会　1985『シヌグ堂遺跡』沖縄県文化財調査報告書第67集
沖縄県教育委員会　2000『沖縄県地質鉱物緊急実態調査報告書―沖縄県の地形・地質―』沖縄県天然記念物調査シリーズ第39集
沖縄県立博物館･美術館　2009『南城市ハナンダガマ遺跡発掘調査報告書』
沖縄県立博物館･美術館　2010『南城市武芸洞遺跡発掘調査概要報告書』
沖縄県立埋蔵文化財センター　2004『基地内文化財III―基地内埋蔵文化財分布調査概要（平成14･15年度）』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第24集
沖縄県立埋蔵文化財センター　2006『新城下原第二遺跡　―キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第35集
沖縄考古学会　1978『石器時代の沖縄』新星図書
小田静夫　1997「沖縄県国頭村出土の丸ノミ形石斧二例」『南島考古』№16　沖縄考古学会
小田静夫　2003「山下町第1洞穴出土の旧石器について」『南島考古』№22　沖縄考古学会
小田静夫　2009「港川フィッシャー遺跡について」『南島考古』№28　沖縄考古学会
小田静夫　2010「ピンザアブ洞穴と南琉球の旧石器文化」『南島考古』NN№29　沖縄考古学会
小田富士雄　2000「沖縄の『弥生時代』と外来遺物」『琉球･東アジアの人と文化』（上巻）高宮廣衞先生古稀記念論集刊行会
小畑弘己･盛本　勲･角縁　進　2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の化学分析による産地推定とその意義」『Stone　Sources』3　石器原産地研究会
小元　久仁夫　2007「南西諸島で最古のビーチロックとその意義」『日本大学文理学部自然科

学研究所研究紀要』№42
笠利町教育委員会・笠利町歴史民俗資料館　1989『喜子川遺跡―第１次・第２次発掘調査報告』
片桐千亜紀　2006「第７章結語」『新城下原第二遺跡　―キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告―』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第35集　沖縄県立埋蔵文化財センター
片桐千亜紀・小橋川　剛・島袋利恵子・土肥直美　2007「具志川島岩立遺跡出土人骨の再整理」『沖縄埋文研究』５　沖縄県立埋蔵文化財センター
加藤晋平　1977「キズ痕のある出土獣骨片」『伊江島ゴヘズ洞の調査―第１次概報―』伊江村文化財調査報告書第２集　伊江村教育委員会
金子浩昌　1998「糸満市大度貝塚出土の脊椎動物遺骸」『大度貝塚』糸満市文化財調査報告書第14集　糸満市教育委員会
金子浩昌　2002「知念村熱田原貝塚出土の動物遺体」『熱田原貝塚発掘調査報告書』知念村文化財調査報告書第10集　知念村教育委員会
神谷厚昭　2007『琉球列島ものがたり―地層と化石が語る２億年史』ボーダーインク
河口貞徳　1985「土器」『中甫洞穴』知名町埋蔵文化財発掘調査報告書２　知名町教育委員会
河口貞徳　1985「塞ノ神式土器と轟式土器」『鹿児島考古』第19号
河名俊男　1988『シリーズ沖縄の自然③　琉球列島の地形』新星図書出版
河名俊男･菅　浩伸　1996「沖縄島南部の具志頭海岸における完新世離水サンゴ礁の掘削によるボーリングコアの記載」『琉球大学教育学部紀要　第一部・第二部』(48)　琉球大学教育学部
河名俊男･菅　浩伸　2002「沖縄島南部の具志頭海岸における完新世離水サンゴ礁の新たな掘削によるサンゴ礁の内部構造　―ボーリングコアの記載―」『琉球大学教育学部紀要』(60)　琉球大学教育学部
河名俊男　2006「沖縄島東南部とその周辺島のサンゴ質堆積物から推定される約3400年前の大波の襲来」『琉球大学教育学部紀要』68　琉球大学教育学部
岸本利枝　2006「大堂原貝塚出土の曾畑式土器様式について」『あじまぁ』名護博物館紀要13　名護博物館
岸本義彦･山田　正　1978「糸満市名城前原遺跡出土の室川下層式土器について」『南島考古』№６　沖縄考古学会
木下尚子･中村　愿　1979「具志川島岩立地区の第３次発掘調査」『具志川島遺跡群―岩立地区埋葬遺構の調査―』伊是名村文化財調査報告書第３集　伊是名村教育委員会
宜野湾市教育委員会　1991『ヌバタキ―都市計画街路２－１－１号建設に係る緊急発掘調査―』
宜野湾市教育委員会　2005『嘉数テラガマ洞穴遺跡』宜野湾市文化財調査報告書第35集
木村政昭・安里嗣淳・中村俊夫・杉山真人・松浦暢昌　2003「沖縄県与那国島トゥグル浜遺跡およびビーチロック類の年代測定」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』XIV　名古屋大学
具志頭村教育委員会　1986『具志頭村の遺跡』具志頭村文化財調査報告書第３集
具志頭村教育委員会　2002『港川フィッシャー遺跡―重要遺跡確認調査報告―』具志頭村文化財調査報告書第５集
工藤雄一郎　2010「旧石器時代研究における年代･古環境論」『講座日本の考古学１　旧石器時代』(上)　青木書店
桑畑光博　1999「Ⅱ．列島における縄文土器型式編年研究の成果と展望(2)　九州地方前期（轟式)」『縄文時代』第10号　縄文時代文化研究会
甲元眞之　2008「気候変動と考古学」『熊本大学文学部論叢（歴史学篇)』97　熊本大学
国分直一･三島　格　1973「沖縄主要遺跡におけるC14年代の検討」『考古学ジャーナル』№83　ニューサイエンス社
湖城　清　1998「第２節　自然遺物（貝殻)」『大度貝塚』糸満市文化財調査報告書第14集　糸満市教育委員会
小林謙一　2008「縄文土器の年代（東日本)」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
斎藤文紀　1998「東シナ海陸棚における最終氷期の海水準」『第四紀研究』37 (3)　日本第四紀

学会
相美伊久雄　2010 「九州南部における中期前葉土器の現状と課題」『九州の縄文時代中期土器を考える』第20回九州縄文研究会佐賀大会資料集　九州縄文研究会
新里貴之　2007 「南西諸島出土のヒスイ製品」『南島考古』№26　沖縄考古学会
新里貴之　2008a 「喜念・佐弁砂丘遺跡群トマチン遺跡発掘調査概要報告―トマチン遺跡第１次～３次調査の概要」『人類史研究』Vol. 14　13―28頁　人類史研究会
新里貴之　2008b 「琉球縄文土器（後期）」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション
新里貴之　2010 「南西諸島の縄文集落の葬墓制」『シリーズ縄文集落の多様性Ⅱ　葬墓制』 雄山閣
島袋春美　2006 「第５章第18節貝類遺体」『新城下原第二遺跡　―キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告―』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第35集　沖縄県立埋蔵文化財センター
澄田直敏・堂込秀人・池畑耕一　2003 「喜界町総合グラウンド遺跡（弓道場）出土の土器」『鹿児島考古』第37号　鹿児島考古学会
瀬川拓郎　1980 「『環状土籬』の成立と解体」『考古学研究』第27巻第３号　考古学研究会
高宮廣衞　1968 「那覇市の考古資料」『那覇市史』資料篇第１巻１　那覇市
高宮廣衞　1984 「暫定編年（沖縄諸島）の第３次修正」『沖国大文学部紀要社会学科篇』12―１　沖縄国際大学
高宮廣衞　1991 「宇和川原半洞穴採集土器の類例」『南島考古』№11　沖縄考古学会
高宮廣衞　1993a 「第５章　具志川島の遺跡―むすびにかえて―」『具志川島遺跡群』 伊是名村文化財調査報告書第９集　伊是名村教育委員会
高宮廣衞　1993b 「室川下層式土器と南島」『考古論集―潮見浩先生退官記念論文集』 潮見浩先生退官記念事業会
高宮廣衞　1999 「旧石器時代の沖縄諸島」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第23号　読谷村立歴史民俗資料館
高宮廣衞・金武正紀・鈴木正男　1975 「那覇市山下町洞穴発掘経過報告」『人類学雑誌』83(2)　日本人類学会
高宮広土　1997 「ヒトはいつごろ沖縄諸島に適応したか」『南島考古』№16　沖縄考古学会
高宮広土　2005 『島の先史学―パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代―』 ボーダーインク
谷口康浩　2005 「Ⅳ－１章　環状集落の成立過程―縄文時代前期における集団墓造営と拠点形成の意味―」『環状集落と縄文社会構造』
玉城村教育委員会　1979 『玉城村の遺跡―第１次分布調査概報―』
玉城村教育委員会　2002 『志堅原遺跡』 玉城村文化財調査報告書第３集
多和田真淳　1956 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念」『文化財要覧　1956年版』 琉球政府文化財保護委員会
知名町教育委員会　1985 『中甫洞穴』 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
知念村教育委員会　1986 『知念村の遺跡―詳細分布調査報告書―』 知念村文化財調査報告書第４集
知念村教育委員会　1994 『下上原貝塚』 知念村文化財調査報告書第６集
知念村教育委員会　2002 『熱田原貝塚発掘調査報告書』 知念村文化財調査報告書第10集
辻　誠一郎　2007 「第Ⅲ章層序と年代（Ⅰ低湿地地区）」『伊礼原遺跡』 北谷町文化財調査報告書第26集　北谷町教育委員会
辻　誠一郎・大松しのぶ・辻　圭子　2007 「伊礼原遺跡の植物遺体群」『伊礼原遺跡』 北谷町文化財調査報告書第26集　北谷町教育委員会
當眞嗣一　1997 「具志頭城北東崖下洞穴内で発見された明刀銭について」『沖縄県立博物館紀要』第23号　沖縄県立博物館
時津裕子　2000 「南西諸島における箱式石棺墓の再検討」『琉球・東アジアの人と文化』（上巻）　高宮廣衞先生古稀記念論集刊行会
土肥直美　2008a 『具志川グスク崖下地区の発掘調査』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）研究成果報告書

土肥直美　2008b「沖縄の人骨調査―琉球列島の人類史解明を目指して」 Anthropological Science （Japanese Series), Vol. 116 №2
仲宗根求・西銘章・宮城弘樹・安座間充　2001「読谷村出土の弥生土器・弥生系土器について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第25号　読谷村立歴史民俗資料館
仲宗根求・小原裕也　2006「平成17年度浜屋原貝塚B地点発掘調査の概報」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第30号　読谷村立歴史民俗資料館
中園　聡　2000「沖縄諸島出土の九州系弥生土器―様式の同定と解釈―」『琉球・東アジアの人と文化』（上巻） 高宮廣衞先生古稀記念論集刊行会
名島弥生・安斎英介・宮城弘樹　2008「南西諸島の炭素14年代資料の集成」『南島考古』№27　沖縄考古学会
西銘　章　2008「崖葬墓考抄」『廣友会誌』第4号　廣友会
新田重清　1973「沖縄の先土器文化」『琉球の文化』第3号　琉球文化社
新田重清　1975「知念上クルク原貝塚採集の貝製品について」『沖縄県立博物館紀要』第1号　沖縄県立博物館
新田重清　1976「糸満市喜屋武同村貝塚出土の曽畑・轟系土器について」『沖縄県立博物館紀要』第2号　沖縄県立博物館
長谷川善和　2002「港川フィッシャーと動物たち」『沖縄県立博物館復帰30　周年記念特別展　港川人展』図録　沖縄県立博物館
福沢仁之　1995「天然の『時計』・『環境変動検出計』としての湖沼の年縞堆積物」『第四紀研究』34(3)
藤田祐樹　2009「第4章　ハナンダガマ出土の獣類化石について」『南城市ハナンダガマ遺跡発掘調査報告書』 沖縄県立博物館・美術館
古川博恭　1980「琉球列島における文化遺物包含層の層序と編年」『第四紀研究』18(4)
古川博恭　1985「第1章第1節地形・地質」『那覇市史通史篇第1巻前近代史』 那覇市
目崎茂和　1985「第1章第2節古地理」『那覇市史通史篇第1巻前近代史』 那覇市
松下孝幸編　2007「ガルマンドウ原洞穴遺跡発掘調査報告」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第2号　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
松下孝幸編　2009「沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告（Ⅰ）」『土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要』第4号　土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
松田順一郎　2007「第Ⅲ章層序と年代（Ⅱ伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震痕跡）」『伊礼原遺跡』 北谷町文化財調査報告書第26集　北谷町教育委員会
松本雅明・富樫卯三郎　1961「轟式土器の編年」『考古学雑誌』47(3)
宮城弘樹　2000「貝塚後期土器の研究（II）？後期遺跡の集成」『南島考古』№19　沖縄考古学会
森　威史　1969「琉球諸島における新しいラジオカーボン測定値とその編年的意義」『考古学ジャーナル』 №39　ニューサイエンス社
盛本　勲　1986「具志堅ウージ洞穴遺跡の発掘調査」『知念村の遺跡　詳細分布調査報告書』 知念村文化財調査報告書第4集　知念村教育委員会
宮地聡一郎　2009「弥生時代開始年代をめぐる炭素14年代測定土器の検討」『考古学研究』55(4)　考古学研究会
山田康弘　1995「多数合葬例の意義―縄文時代の関東地方を中心に―」『考古学研究』第42巻第2号　考古学研究会
山崎真治　2007「曽畑式土器の終焉―有明海北岸部の事例分析から見た九州縄文前期末土器群の様相―」『古文化談叢』第57集　九州古文化研究会
山崎真治　2008「先史時代における腰岳系黒曜石の流通と画期」『沖縄県立博物館・美術館　博物館紀要』 第1号　沖縄県立博物館・美術館
山崎真治・新里尚美・金城達・山田浩久・藤田祐樹　2009「八重瀬町具志頭グスク崖下採集の遺物について」『沖縄県立博物館・美術館　博物館紀要』 第2号　沖縄県立博物館・美術館
山崎真治・横尾昌樹・大城秀子　2010「南城市親慶原ウフニクガマ採集の遺物について」『南島考

古』№29　沖縄考古学会
山崎真治・藤田祐樹・大城逸朗・西秋良宏・菅原広史・江田真毅・松浦秀治・近藤恵・海部陽介・坂上和弘・久保麦野・溝口優司・諏訪元・馬場悠男　2010「沖縄における更新世／完新世移行期の人類学・考古学的調査」『日本考古学協会第76回総会研究発表要旨』日本考古学協会
横尾昌樹　2010「縄文時代前期相当期土器研究史」『沖縄国際大学大学院地域文化論叢』第12号　沖縄国際大学
読谷村教育委員会・読谷村立歴史民俗資料館　1978『木綿原』読谷村文化財調査報告書第５集
Nakagawa, R., Doi, N., Nishioka, Y., Nunami, S., Yamauchi H., Fujita, M., Yamazaki, S., Yamamoto, M., Katagiri, C., Mukai, H., Matsuzaki, H., Gakuhari, T., Takigami, M., Yoneda, M.（2010）“Pleistocene human remains from Shiraho−Saonetabaru Cave on Ishigaki Island, Okinawa, Japan, and their radiocarbon dating” Anthropological Science 118（３）, Anthropological Society of Nippon
Suzuki, H., Hanihara, K.（1982）“The Minatogawa Man. The Upper Pleistocene Man from the Island of Okinawa.” Bulletin 19, The University Museum of the University of Tokyo, Tokyo.

[1] ここで言う先土器時代とは、土器出現以前の人類文化を想定している。日本本土では、土器出現期が後期更新世末に遡ることは確実なので、先土器時代は後期更新世およびいわゆる旧石器時代に含まれることになるが、沖縄・奄美では現在のところ層序的に遡及しうる最古の土器は、約7,000〜6,000 C14 BP前後に出現する無文土器あるいは爪形文土器であり、先土器文化が完新世に入っても継続していた可能性がある。

[2] 本稿で言及するC14年代値は、特に言及しない限り未較正値で、半減期は5,570または5,568である。沖縄のC14年代測定値については、半減期5,568、5,570を用いた年代値の他に、半減期5,730を用いたものもあり、注意が必要である（名島・安斎ほか　2008）。

[3] いわゆる叉状骨器を含む沖縄のシカ類「骨角製品」は、加藤晋平氏（1977）によって詳しく論じられているように、その殆どは人工品と見ることはできない。沖縄県立博物館・美術館が実施している化石産出地の調査においても、これまでのところこの種の「骨角製品」で、確実に人工品と認定できるものには接していない（藤田　2009など）。

[4] 琉球列島における絶滅シカ類の年代については、大塚裕之氏らによる重要な研究がある（大塚・中村ほか　2008）。

[5] この時期に絶滅した動物としては、リュウキュウジカ、リュウキュウムカシキョンのほかにオオヤマリクガメなどが知られている。

[6] ガマは沖縄の方言で洞穴の意。報文中（山崎・横尾ほか　2010）では沖縄県洞穴実態調査報告（沖縄県教育委員会　1978）に基づいてウフニクガマと呼称したが、ティーラガマとする文献もあり、現在行政的にはティーラガマと呼ばれている。

[7] 海産貝類の年代値を議論するためには、後述するように海洋リザーブ効果を考慮することが必要であるが、誤差が1，000年程度生じても以下の議論に大きな影響はない。

[8] 最終的に堆積したのがほぼ同時ということであって、古い時期のものが新しい堆積物の中に入り込むことは容易に起こりうる。ただし、ティーラガマで古い年代値を出したシレナシジミは合弁の状態であり、撹乱による混入は想定しづらい。いずれにせよ港川やティーラガマの問題の海産・汽水産貝は、人による持ち込みを考えなければ説明できないものである。

[9] 伊礼原遺跡では、第11層の埋没林（1,100 C14 BP）の上位に位置する７層のカワニナから2,460 C14 BPという年代値が得られており、δ13Cの値から「食性など何らかの原因によって相当古く測定されたものと考えることができる」と評価されている（辻2007）。リザーバ効果の影響だけでなく、カワニナやマイマイのように非人為的営力によって容易に運搬される試料に基づく年代値は、慎重に取り扱う必要がある。

[10] 爪形文土器とその文化については、伊藤圭氏の一連の研究（伊藤 2007a、2007b、2008）が詳しい。

[11] 野国Bや新城下原第２の無文土器は破片の出土量が

乏しいため、確実に無文なのかどうかという重要な点については不明瞭と言わざるを得ないが、文様の乏しい土器群であることは確かであろう。

[12] ただし、さらに下位に位置するⅩⅣ層出土のイノシシ骨からは6,022 C14 BPという年代値も得られているので、新城下原第２遺跡の層序については慎重な扱いが望まれる。

[13] 伊藤慎二氏（2008）が爪形文系新２段階に位置づけた、凹点文と沈線文をもつ渡具知東原出土の小片（第１図７）は、同遺跡出土の爪形文土器とは凹点文の形状や、色調、胎土において差異が認められることから、筆者は曽畑式の古手のものと推定している。

[14] 曽畑式や条痕文系土器群をめぐる研究史については、横尾昌樹氏による総括がある（横尾　2010）。

[15] かつて河口貞徳氏は、中甫洞穴第４層中部出土の条痕文土器を、轟I式に同定した（河口　1985）。確かにこの種の条痕文は、胎土や焼成まで含めて早期轟式条痕文に酷似していると言わざるを得ない。しかし、口縁端部の処理や底部の形態には差異も認められ、層序的にも爪形文に後出することは確実である。条痕文や貝殻文の年代的位置づけは、見た目だけでは難しい、というのが筆者の感想である。また、中甫の貝殻文土器には胎土に石灰岩片を含むものが認められるが、この特徴は東原式、曽畑式、室川下層式にも共通して見られる。一方、ティーラガマ、港川上部、喜界町総合グラウンドの土器には石灰岩片の混入は見られない。無文土器およびヤブチ式の古手のものにも石灰岩片の混入は見られないので、この点からも中甫の土器は東原式や曽畑式に近い。

[16] 志堅原の年代測定試料はマツ属（リュウキュウマツ？）と同定されており、燃料材の可能性がある。

[17] 木綿原の年代測定試料についての基本情報は、報告書に記載されているデータをもとに、学習院大学年代測定室HPに公開されているデータによって補完した。

学習院大学年代測定室HP
(http://www.gakushuin.ac.jp/univ/sci/top/nendai_data/index.htm)

なお木綿原では、下部に縄文後期の埋葬群が、上部に縄文晩期の石棺墓群が、ほぼ1,000年もの時を経て重複しており、時代を越えても似たような場所が墓地に選ばれたことを端的に示す重要な事例と言える。

[18] このことから、石棺墓は崖葬墓と同様に、土地の占有を他者に顕示するための装置（モニュメント）としても機能していた可能性が指摘できよう（４―４参照）。伊仙町トマチン遺跡（新里　2008a）や南城市武芸洞遺跡（沖縄県立博物館・美術館　2010）で見られる重層構造の石棺墓を理解する手がかりも、その辺りにあるのではないだろうか。

[19] 年率の算定にあたって、今回は縄文時代早・前期を7,000～5,500 cal BPの1,500年間、中期を5,500～4,500 cal BPの1,000年間、後期を4,500～3,200 cal BPの1,300年間、晩期を3,200～2,500 cal BPの700年間、弥生～平安並行時代を2,500 cal BP～14世紀の1，800年間とした（小林　2008）。

[20] 大嶋和雄氏（1980）は、沖縄諸島の乗る島棚上に、①－20m以浅、②－40～60m、③－60～80m、④－100～120mの４つの平坦面を指摘しており、このうち④－100～120mの平坦面がOIS２の最終氷期最寒冷期（LGM）に、③の－60～80mの平坦面が、OIS３の時期に対応する可能性が推定できる。また、沖縄島では、国頭村辺戸、恩納村瀬良垣、那覇市波ノ上、糸満市米須海岸、八重瀬町具志頭海岸など、海岸線に面した海食崖に開口する洞穴やフィッシャー堆積物中からシカ類化石が産出することが知られており（大城・野原　1977）、シカ類の生息していた時代の海面が、現海面よりも下位にあったことがわかる。

[21] 沖縄島南部では低地遺跡の調査が少ないため、この時期の遺跡が沖積層の深部に埋没している可能性は考慮しておかなければならない。この問題は、後で砂丘形成の問題と合わせて再度取り上げる。

[22] ただし、ハンタ原で年代値が得られた人骨は、岩陰の最も奥まった場所に形成された集骨３出土のものであり、それ以外の集骨１、２、４を全て集骨３と同一時期と見て良いかどうかについては、今後の検討が必要と思われる。なお、大度貝塚では大山式やカヤウチバンタ式も採集されており、比較的長期にわたる遺跡と見られる。

[23] 安里嗣淳氏（2004）は、沖縄島北部・中部の先史遺跡を、「A.　海浜または海岸小丘に居住し、後背地の谷間から流れる小川や後背斜面の小渓流を利用していたとみられる遺跡」と、「B.　石灰岩台地縁辺付近や海浜に居住し、付近から湧き出る泉を利用したとみられる遺跡」に区分しているが、伊波・荻堂式期の遺跡立地はこのうちの後者に相当する。

[24] 先史時代の集団墓については、長い研究の歴史がある（山田　1995、谷口　2005などを参照）。このよう

な多数の人骨が葬られた集団墓を解釈するためには、墓地を営んだ集団の規模や墓地の継続期間の解明が必要不可欠であり、今後、意識的な調査が望まれる。なお、崖葬墓の中には集骨や追葬が行われず、ほぼ一個体分の骨格が残される事例も散見され（沖縄県立博物館・美術館　2009、2010）、そのあり方は単純ではない。また、沖縄では縄文後期以前の墓の実態は不明瞭であるが、名護市大堂原や読谷村渡具知東原では曽畑式期、糸満市喜屋武貝塚では室川下層式期、北谷町伊礼原遺跡では中期の人骨が確認されており、生活地の近くに墓（恐らく単体埋葬の土坑墓）が営まれていたようである（新里　2010）。後期段階でも、先述の木綿原などでは土坑墓が営まれており、崖葬墓と土坑墓の違いが何を意味するのか、興味あるところである。土坑墓であっても、骨の取り出しなどには注意が必要であろう。

[25] 瀬川拓郎氏（1980）は、北海道の環状土籬について論じる中で、こうした墓の対外的な意味についても言及しており、重要な視点と思われる。